

郡川遺跡

I 第6次調査
II 第7次調査

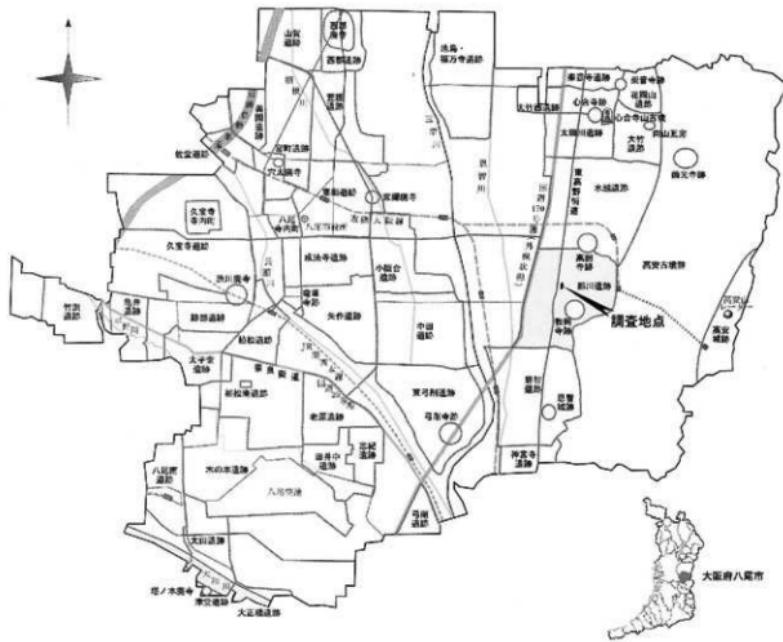
2009年

財団法人 八尾市文化財調査研究会



郡川遺跡

I 第6次調査
II 第7次調査



2009年

財團法人 八尾市文化財調査研究会

はしがき

郡川遺跡は八尾市の東部、生駒山地のなかでも高安山の麓に広がる扇状地にあたります。八尾市の東部の扇状地は古来より人々の生活の場として栄えていた地域であり、現在でもそれらの先人が残した貴重な文化遺産が数多く遺存しております。

近年、都市開発に伴い各種土木工事が実施され、破壊され消滅する埋蔵文化財が存在します。それらに対して事前の発掘調査を実施し、記録保存をおこない、先人が残してくれた貴重な文化財を後世に伝承することが我々の責務であると認識する次第であります。

郡川遺跡は過去の発掘調査で、縄文時代から近世に至るまでの生活跡を発見しています。この度、平成19年度に実施いたしました保育所建設に伴う報告書を刊行する運びとなりました。本調査においては弥生時代後期および古墳時代後期の居住域、平安～鎌倉時代の生産域などの遺構が見つかりました。今回の調査成果は、山麓部から扇状地にかけての集落の実態を解明する一つの資料になります。

本書が学術研究の資料として、また文化財保護への啓發に広く活用されることを願うものであります。

最後になりましたが、この発掘調査が、関係諸機関及び地元の皆様の多大なる御理解と御協力によって進めることができましたことに深く感謝の意を表します。今後とも文化財保護に一層の御指導ならびに御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

平成21年3月

財団法人 八尾市文化財調査研究会
理 事 長 岩崎 健二

序

1. 本書は財団法人八尾市文化財調査研究会が平成19年度に郡川遺跡内で実施した発掘調査の報告書を収録したものである。
1. 内業整理および本書作成の業務は、各現地終了後に着手し平成21年3月をもって終了した。
1. 本書に収録した各調査報告書の文責は以下の通りである。
 - I 木村健明・成海佳子
 - II 西村公助
1. 全体の編集は西村が行った。
1. 本書掲載の地図は、大阪府八尾市役所発行の2500分の1地形図(平成8年7月編纂)を基に作成した。
1. 本書で用いた図に付す高さの基準は東京湾標準潮位(T.P.)で、方位は国土座標第VI座標系の座標北を示している。
1. 土色については、『新版 標準土色帖』1996 農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修を使用した。
1. 各調査に際しては、写真・実測図を作成している。市民の方々に広く利用されることを希望する。

目 次

はしがき

序

I 郡川遺跡第6次調査(KR2007-6).....	1
II 郡川遺跡第7次調査(KR2007-7)	13
報告書抄録	

I 郡川遺跡第6次調査(KR2007-6)

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市黒谷一丁目56番1で実施した(仮称)新高安保育所建設に伴う造成工事に伴う郡川遺跡第6次発掘調査(KR2007-6)の発掘調査報告書である。
 1. 本調査は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
 1. 調査は当調査研究会の成海佳子が担当した。
 1. 現地調査の期間は平成19年4月23日に着手し4月27日に終了した。調査面積は約44m²である。
 1. 現地調査においては、青山洋・飯塚直世・市森千恵子・岩沢玲子・中浜輝志・鷹羽侑太・村井厚三の参加を得た。(敬称略、五十音順)
- 内業整理は上記が参加し、現地調査終了後に着手して平成20年12月29日をもって終了した。
1. 本書の執筆は、第1章および第2章の出土遺物は木村健明が、それ以外は成海が行い、編集は木村が行った。

本　文　目　次

第1章 位置と環境.....	1
第2章 調査概要.....	5
第1節 調査の方法と経過.....	5
第2節 調査の概要.....	5
第3章まとめ.....	12

挿 図 目 次

第1図 調査地周辺図	2
第2図 地区割図	5
第3図 1区平断面図	6
第4図 1区落込み11出土遺物実測図	6
第5図 2区平断面図	7
第6図 2区7層・8層出土遺物実測図	7
第7図 3区平断面図	7
第8図 3区溝32出土遺物実測図	7
第9図 4区平断面図	9
第10図 4区出土遺物実測図	9
第11図 5区平断面図	10
第12図 5区7層出土遺物実測図	10
第13図 6区平断面図	10
第14図 7区平断面図	11
第15図 7区落込み75出土遺物実測図	11

表 目 次

表1 周辺の調査一覧表	3
-------------	---

図 版 目 次

図版1 調査地全景 地形測量 1区人力掘削 1区1面全景 2区1面全景 2区2面全景 3区機械・人力掘削 3区1面全景	
図版2 4区1面遺構検出 4区1面全景 4区2面遺構検出・掘削 4区2面全景 4区3面 全景 4区北壁実測 5区1面遺構検出・掘削 5区1面全景	
図版3 6区1面全景 6区北壁 7区1面遺構検出・掘削 7区1面全景 7区2面遺構検出 7区2面全景	
図版4 1区落込み 11・2区7層・8層出土遺物 3区溝22・4区2層・7層・落込み48・5 区7層・7区落込み75出土遺物	

第1章 位置と環境

郡川遺跡は、八尾市の南東部に存在する縄文時代中期末～室町時代に至る複合遺跡で、地理的には、国道170号線から東側の扇状地一帯に位置する。現在の行政区画では郡川一～五丁目、教興寺一～七丁目、垣内一～五丁目、黒谷一～四丁目が遺跡の範囲である。当遺跡周辺は北に水越遺跡、東に高安古墳群、南に恩智遺跡が接しており、水越遺跡との境界には高麗寺跡、郡川遺跡内に教興寺跡が所在する。当遺跡内では八尾市教育委員会(以下市教委)と(財)八尾市文化財調査研究会(以下研究会)が発掘調査を実施しており、弥生時代から近世の遺構・遺物が検出されている。以下、隣接する水越遺跡の調査成果も含めて、周辺の歴史的環境について時代ごとに記述する。

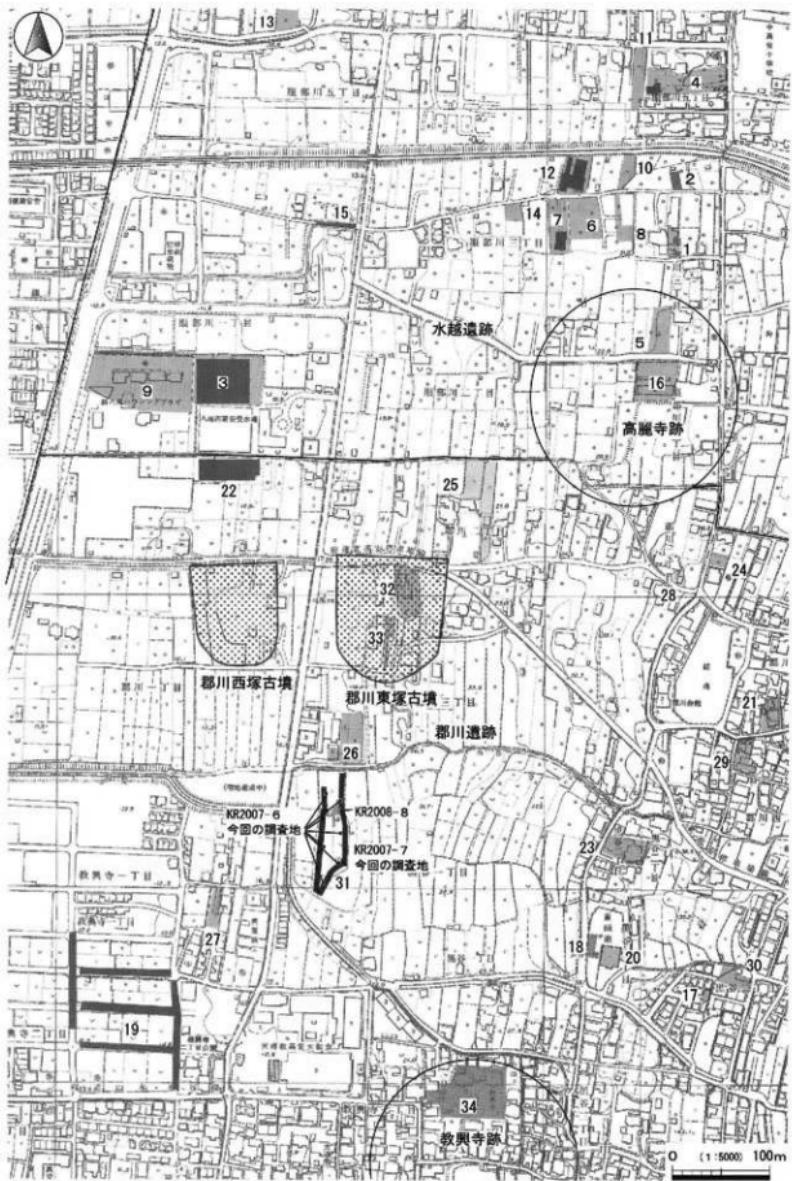
現時点では周辺で最も古い遺構・遺物は5(番号は第1図・表1に対応する。以下同じ)で検出された縄文時代中期末～後期中葉の遺構である。この調査成果によって、馬場川遺跡(東大阪市)と恩智遺跡の間の空白域を埋める集落が水越遺跡に存在したと考えができるようになった。また7において縄文時代のピットが検出されている。遺構は確認されていないが、遺物は3(後期～晩期)・22(中期末)で出土している。現時点では5・7周辺と3・22周辺の2箇所に縄文時代の遺構が存在していると考えられる。

弥生時代に入ると、19で前期と中期の遺構、23で中期の遺構が検出されている。検出例が少ないとため定かではないが、それぞれの調査区周辺に集落が存在したと考えられる。後期になると、遺構・遺物の検出される地点は急増し、第1図北東部(1・2・4・7・8・12・14)で溝や土坑など、西部の3で堅穴住居跡・土器棺など、今回報告する31で溝などをそれぞれ検出している。

3では堅穴住居の他に弥生時代後期末～古墳時代前期にかけての周溝墓も検出されており、居住地から墓域への変遷を窺うことができる。また検出された4基の周溝墓の内、2基が河内において当該期では少ない円形を呈する点が特筆され、出土土器の年代から円形から方形へと形態が変容した可能性も指摘されている。また遺物のみ出土している地点に東側の21・南西側の19がある。集落の規模やそれぞれの関連は不明であるが、水越遺跡南部から郡川遺跡にかけての範囲で弥生時代後期に活発な活動がおこなわれていたことが窺える。

古墳時代前期には先述した3の周溝墓以外は顯著な遺構が確認されていない。ただし19では前期～後期の水田を検出しており、19の周辺は耕作地として利用されていたようである。中期には17・18で溝を検出していることから、集落の中心が東側に移動したようである。17では、轆の羽口・鉄滓・製塙土器・馬の歯などが出土しており、製鐵遺跡であった可能性が指摘されている。

後期に入ると、今回の調査地の北側100mに郡川東塚古墳および郡川西塚古墳が築かれる。いずれも前方後円墳で、郡川東塚古墳は、全長50m・後円部径25mと推定される。明治30(1897)年の開墾時に後円部に南に開口する両袖式の横穴式石室が存在することが確認されており、石室内から銅鏡・玉類・刀劍類などの副葬品が多数出土している。また、近年宅地開発に伴って墳丘が調査され(32・33)、良好な状態で遺存していた墓石や埴輪列を確認し、墳丘構築法の復元を確認することもできた。一方の郡川西塚古墳は、全長60m・後円部径30mと推定される。こちらも明治35(1902)年の開墾時に後円部に南に開口する左片袖式の横穴式石室が存在することが確認されており、石室内からは銅鏡・玉類・刀劍類などの副葬品が多数出土している。



第1図 調査地周辺図

表1 周辺の調査一覧表

遺跡名	番号	調査名	調査主体	調査年	文獻
木越遺跡	1	89-550	市教委	1990年6~7月	市教委 1991 『八尾市内遺跡平成2年度発掘調査報告書』 八尾市文化財調査報告22
	2	MK91-4	研究会	1992年2月	研究会 1992 『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』 対団体八尾市文化財調査研究会報告34
	3	94-663	市教委	1995年7月	市教委 1996 『八尾市内遺跡平成7年度発掘調査報告書』 八尾市文化財調査報告34
	4	MK95-5	研究会	1995年10月~3月	研究会 2006 『財団法人八尾市文化財調査研究会報告92』
	5	95-460	市教委	1995年10月	市教委 1996 『八尾市内遺跡平成7年度発掘調査報告書』 八尾市文化財調査報告33
	6	MK96-6	研究会	1996年8~9月	研究会 1998 『財団法人八尾市文化財調査研究会報告60』
	7	95-582	市教委	1996年5月	市教委 1997 『八尾市内遺跡平成8年度発掘調査報告書』 八尾市文化財調査報告36
	8	99-342	市教委	1999年10月	市教委 2000 『八尾市内遺跡平成11年度発掘調査報告書』 八尾市文化財調査報告42
	9	MK00-7	研究会	2001年3月	市教委・研究会 2000 『八尾市立埋蔵文化財センター報告2 平成12年度』
	10	2001-97	市教委	2001年6月	市教委 2001 『八尾市内遺跡平成13年度発掘調査報告書』 八尾市文化財調査報告36
	11	2002-79	研究会	2002年6月	市教委 2003 『八尾市内遺跡平成14年度発掘調査報告書』 八尾市文化財調査報告48
	12	2003-235	研究会	2003年11月	市教委 2004 『八尾市内遺跡平成15年度発掘調査報告書』 八尾市文化財調査報告49
	13	2004-37	研究会	2004年5月	市教委 2005 『八尾市内遺跡平成16年度発掘調査報告書』 八尾市文化財調査報告30
	14	2005-322	研究会	2005年11月	市教委 2006 『八尾市内遺跡平成17年度発掘調査報告書』 八尾市文化財調査報告53
	15	MK05-6	研究会	2005年12~1月	研究会 2006 『平成17年度(財)八尾市文化財調査研究会報告書』 (財)八尾市文化財調査研究会
	16	2006-162	研究会	2006年7月	市教委 2007 『八尾市内遺跡平成18年度発掘調査報告書』 八尾市文化財調査報告55
	17	2006-293	研究会	2006年11月	
	18	MK06-9	研究会	2006年9月	研究会 2007 『財団法人八尾市文化財調査研究会報告99』
高麗寺跡	19	2008-14	研究会	2009年7月	市教委 2009 『八尾市内遺跡平成20年度発掘調査報告書』 八尾市文化財調査報告59
	20	63-193	市教委	1988年9月	市教委 1989 『八尾市内遺跡63年度発掘調査報告書1』 八尾市文化財調査報告19
	21	89-399	市教委	1990年1月	市教委 1990 『八尾市内遺跡平成元年度発掘調査報告書』 八尾市文化財調査報告21
	22	KR89-1	研究会	1990年2月	研究会 1997 『財団法人八尾市文化財調査研究会報告67』
	23	89-032	市教委	1989年8月	市教委 1990 『八尾市内遺跡平成元年度発掘調査報告書』 八尾市文化財調査報告21
	24	KR90-2	研究会	1990年5~8月	研究会 1999 『財団法人八尾市文化財調査研究会報告64』
	25	90-105	市教委	1990年5月	市教委 1991 『八尾市内遺跡平成2年度発掘調査報告書』 八尾市文化財調査報告23
	26	93-075	市教委	1993年7~8月	市教委 1994 『八尾市内遺跡平成5年度発掘調査報告書』 八尾市文化財調査報告29
	27	KR94-3	研究会	1994年5~8月	研究会 2006 『財団法人八尾市文化財調査研究会報告92』
	28	96-275	市教委	1996年9月	市教委 1997 『八尾市内遺跡平成8年度発掘調査報告書』 八尾市文化財調査報告36
	29	98-400	市教委	1998年12月	市教委 1999 『八尾市内遺跡平成10年度発掘調査報告書』 八尾市文化財調査報告49
	30	2002-65	研究会	2002年11月	市教委 2003 『八尾市内遺跡平成14年度発掘調査報告書』 八尾市文化財調査報告48
	31	2002-304	研究会	2003年9月	市教委 2004 『八尾市内遺跡平成15年度発掘調査報告書』 八尾市文化財調査報告49
	32	2003-219	研究会	2003年10月	
	33	2003-278	研究会	2004年9~10月	市教委 2005 『八尾市内遺跡平成16年度発掘調査報告書』 八尾市文化財調査報告50

	29	2006-166	研究会	2006年9月	市教委	2007『八尾市内遺跡平成18年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告55
	30	2006-516	研究会	2007年4月	市教委	2008『八尾市内遺跡平成19年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告57
	KR2007-6		研究会	2007年4～5月		
	31	KR2007-7	研究会	2007年9～11月	市教委	2008『八尾市立高麗文化財センター報告7 年度17年度』
	KR2008-8		研究会	2008年9～10月	研究会	2008『財団法人八尾市文化財調査研究会報告123』
部川東塚古 墳	32	2000-308	市教委	2001年2～12月	市教委	2002『八尾市内遺跡平成13年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告46
	33	T2001-KOII	研究会	2001年10～12月	市教委・研究会	2005『八尾市立高麗文化財センター報告7 年度17年度』
	34	2002-153	研究会	2002年5月	市教委	2003『八尾市内遺跡平成14年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告48
		教興寺跡	市教委	1983年2月	市教委	1983『八尾市内遺跡昭和57年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告9

市教委・八尾市教育委員会 研究会・財団法人八尾市文化財調査研究会

古代には、2で奈良時代に埋没する河川、7で平安時代のピット・土坑が検出されているが、この地域で特筆されることは、高麗寺跡、教興寺跡などの寺院の存在である。高麗寺跡では、15において埋没河川内から瓦が出土したことから、上流に寺院跡が存在する可能性が指摘され、その上流部にあたる16で柱穴を検出し、瓦や土器が出土した。このことから、從来から想定されている範囲に寺院が存在した可能性が高くなっている。教興寺跡では、現在の教興寺の南側に位置する寺池内で3次にわたる調査がおこなわれ、飛鳥時代～中世の瓦が出土している。

中世には、19・29で室町時代の井戸、21で室町時代のピットが確認されている。その他に複数の地点(6・22・24)で溝が検出されているが、これは耕作地化していることを示すものと考えられ、特に22では島畠なども検出されている。

第2章 調査概要

第1節 調査の方法と経過

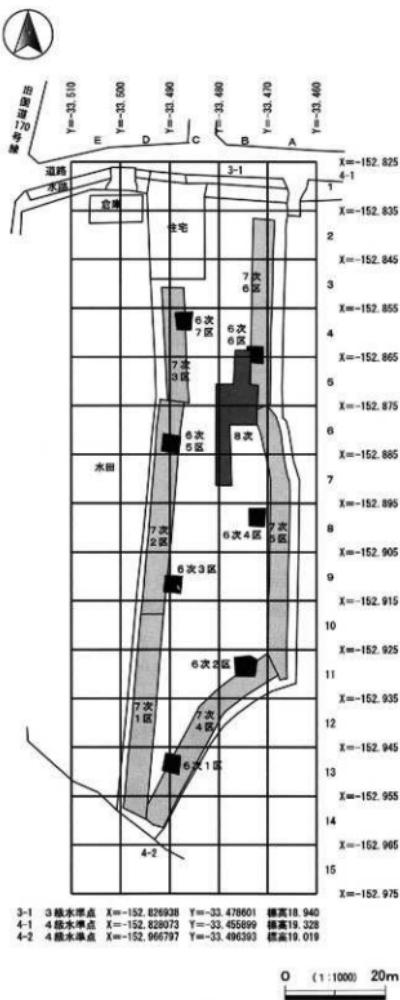
今回の調査は、八尾市黒谷一丁目で行われた造成工事に伴うもので、当研究会が郡川遺跡内で実施した第6次調査(KR2007-6)である。調査で使用した標高値は、調査地北約250m地点の大坂府水準(II-2858 T.P. + 16.871m)である。

調査地は東西20~30m・南北130mの南北に長い敷地で、旧状は耕作地・植木畑で、地表面の高さは東が高く、比高は0.6m程度を測る。調査地内に調査区7か所を設定(南西から1~7区)し、南西端の1区から順次調査を行った。掘削については、現地表(T.P. +17~17.6m)下0.5m前後までを機械掘削、以下0.5m前後までを人力掘削として複数面の調査を行った。最終的に、さらに0.5m前後を機械掘削・人力掘削併用として、下層部分の堆積状況を確認した。写真撮影・図面作成などの記録保存については、随時行った。

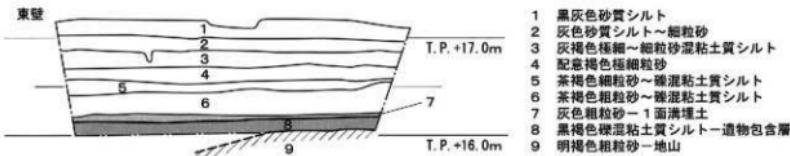
第2節 調査の概要

《1区》

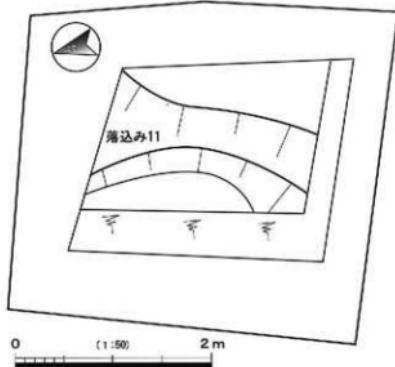
1区の現地表面はT.P. + 17.1m前後を測る。地表下1m前後で8層(黒褐色疊混粘土質シルト)に至る。この層上面(T.P. + 16.2m前後)で南北方向の小溝を検出した(1面)。9層(明褐色粗粒砂・地山)上面(T.P. + 16.0m前後)で落込み11を検出した(2面)。落込み内からは弥生時代後期の土器・古式土師器・須恵器などが出土した。1~3を図示した。1は土師器壺の口縁部である。生駒西麓産の胎土をもつ。2は須恵器杯蓋である。天井部と口縁部境の稜は認められない。TK43型式か。3は須恵器高杯脚部である。長方形透かしをもつ。



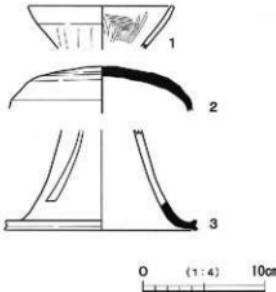
第2図 地区割図



- 1 黒灰色砂質シルト
- 2 灰色砂質シルト～細粒砂
- 3 灰褐色極細～細粒砂混粘土質シルト
- 4 記憶褐色細粒砂
- 5 茶褐色細粒砂～礫混粘土質シルト
- 6 茶褐色粗粒砂～礫混粘土質シルト
- 7 灰色粗粒砂～1面埋塗土
- 8 黑褐色礫混粘土質シルト～遺物包含層
- 9 明褐色粗粒砂～地山



第3図 1区平断面図



第4図 1区落込み11出土遺物実測図

《2区》

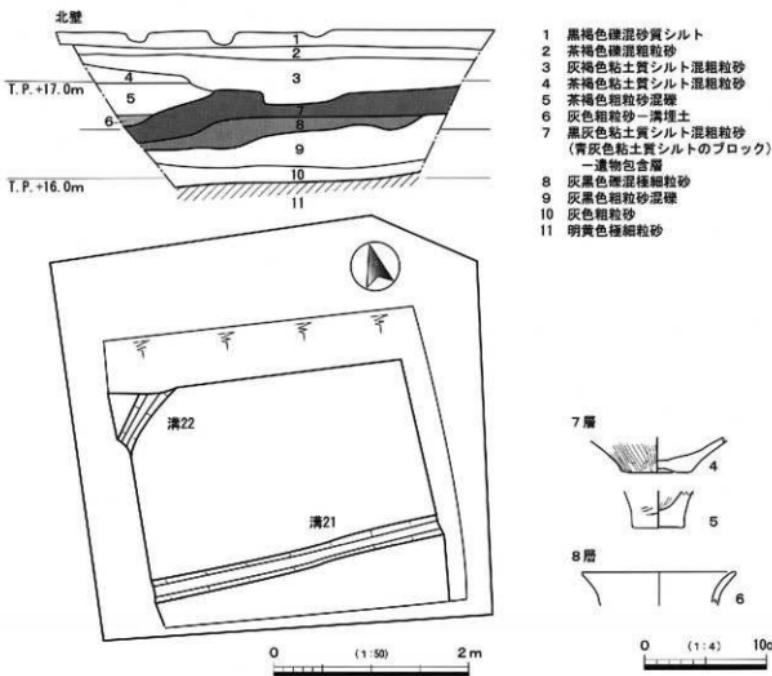
2区の現地表面はT.P. +17.5m前後を測る。地表下50~60cm前後で7層(黒灰色粘土質シルト・混粗粒砂)に至る。この層上面(T.P. +17.0m前後)で溝2条(溝21・22)を検出した(1面)。溝21は調査区内を東西方向に横断するもので、長さ3.0mを検出し、幅20cmを測る。土師器・須恵器が出土した。溝22は調査区北西隅で長さ70cmを検出したもので、幅20cmを測る。土師器杯が出土した。

7層は弥生時代後期の土器・古式土師器・須恵器などを含む。4・5を図示した。ともに生駒西麓産の胎土をもつ平底の底部である。4は中央がわずかにくぼむ。8層(灰黒色礫混極細粒砂)上面(T.P. +16.5m前後)は、西に向かって傾斜している(第2面)。8層は弥生土器・古式土師器を含む。6を図示した。6は土師器壺の口縁部である。9層(灰黒色粗粒砂混礫)上面(T.P. +16.4m前後)も西に向かって傾斜している(第3面)。

以下は、10層(灰色粗粒砂)・11層(明黄色極細粒砂・地山)があり、地山上面は地表下1.6m(T.P. +16.0m)前後を測る。

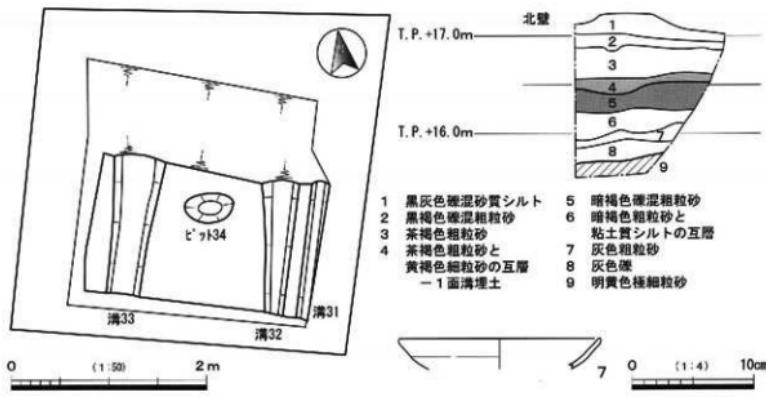
《3区》

3区の現地表面はT.P. +17~17.2mを測る。地表下50~60cm前後で5層(暗褐色礫混粗粒砂)に至る。この層上面(T.P. +16.5m前後)で溝3条(溝31~33)・ピット1個(ピット34)を検出した(1面)。溝はいずれも南北方向にのびるもので、幅は、溝31が20cm、溝32が20~30cm、溝33が35~50cmを測る。ピット34は長径50cm、短径30cmを測る。溝32からは土師器皿や須恵器が出土し、7を



第5図 2区平断面図

第6図 2区7層・8層出土遺物実測図



第7図 3区平断面図

第8図 3区溝32出土遺物実測図

図示した。7は土師器皿である。口縁部にヨコナデを施す。溝33からは須恵器、ピット34からは土師器・須恵器が出土した。また5層中には弥生時代後期の土器、奈良時代～平安時代の土師器・須恵器・黒色土器を含む。6層(暗褐色粗粒砂と粘土質シルトの互層)は湧水が著しく、河川堆積の可能性がある。

以下は7層(灰色粗粒砂)・8層(灰色疊)・9層(明黄色極細粒砂・地山)があり、地山上面は地表下1.2～1.3m(T.P.+15.7～15.8m)前後を測る。

《4区》

4区の現地表面はT.P.+17.5m前後を測る。2層中から出土した土師器皿(8)を図示した。復元口径8cmと小型である。地表下50cm前後で6層(茶褐色疊混砂質シルト)に至る。この層上面(T.P.+17.0m前後)で、ピット5個(ピット41～45)、溝1条(溝46)を検出した(1面)。いずれも調査区内では全体を検出できていない。ピット41から瓦器椀、ピット42・43から土師器、ピット44から弥生土器・土師器・須恵器、ピット45から土師器・製塙土器、溝46から弥生時代後期の土器・土師器・須恵器が出土している。1面のベース層である6層には、弥生時代後期の土器や、奈良時代の土師器・須恵器が含まれる。

7層上面(T.P.+16.8m前後)では、溝1条(溝47)を検出した(2面)。溝47は南北方向にのびるもので、長さ2.5mを検出し、幅15cmを測る。弥生土器が出土した。2面のベース層である7層(黒灰色疊混粗粒砂)には弥生時代後期の土器を含む。9を図示した。9は平底の底部で、生駒西麓産の胎土をもつ。

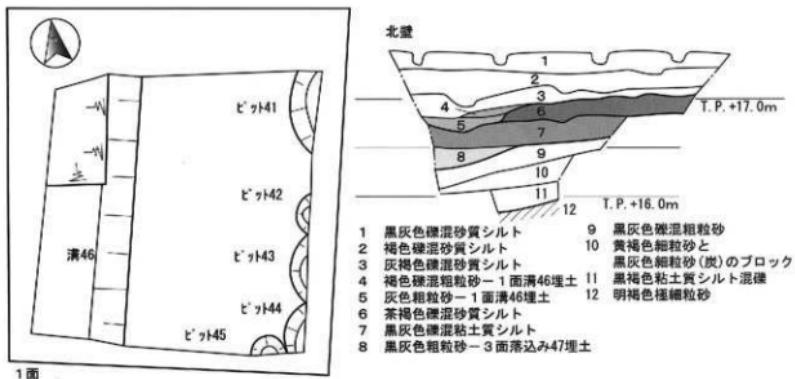
9層上面(T.P.+16.5m前後)では、落込み1か所(落込み48)を検出した(3面)。落込み48は北西方向に向かって落ち込む。深さは20cmを測る。内部からは弥生時代後期の土器が出土した。10～13を図示した。10は壺である。口縁端部は面をなし、凹線状にわずかにくぼむ。11・12は平底の底部である。11は外面に右上がりのタキ、内面にハケを施す。13は高杯脚裾部である。裾端部は上方に拡張し、面をなす。いずれも生駒西麓産の胎土をもつ。

10層は黄褐色細粒砂と黒灰色細粒砂(炭混じり)のブロックであり、遺構埋土の可能性もある。以下は11層(黒褐色粘土質シルト混疊)・12層(明褐色極細粒砂・地山)があり、地山上面は地表下1.5m(T.P.+15.9m)前後を測る。

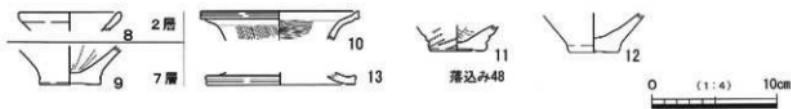
《5区》

5区の現地表面はT.P.+17.1～17.2mを測る。地表下70cm前後で7層(黒褐色粘土質シルト)に至る。この層上面(T.P.+16.5m前後)で、溝4条(溝51～54)を検出した(1面)。溝はいずれも南北方向にのびるものである。溝53のみ調査区内で南端を確認しているが、それ以外は、南北とも調査区外にのびる。幅は、溝51が35cm、溝52が40cm、溝53が15cm、溝54が20～30cmを測る。溝53からは弥生土器、溝54からは弥生時代後期の土器や土師器・須恵器が出土した。1面のベース層である7層には弥生時代後期の土器を含む。14を図示した。14は平底の底部で、生駒西麓産の胎土をもつ。

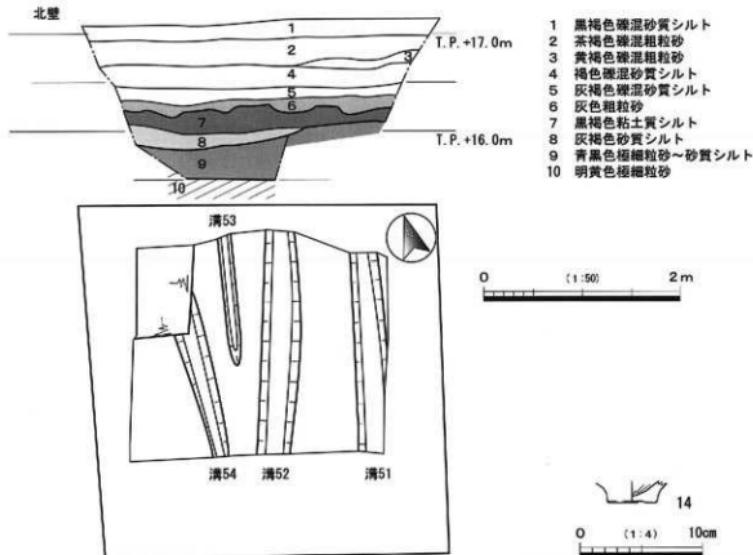
以下は8層(灰褐色砂質シルト)・9層(青黒色極細粒砂～砂質シルト)・10層(明黄色極細粒砂・地山)があり、地山上面は地表下1.5m(T.P.+15.5m)前後を測る。



第9図 4区平断面図

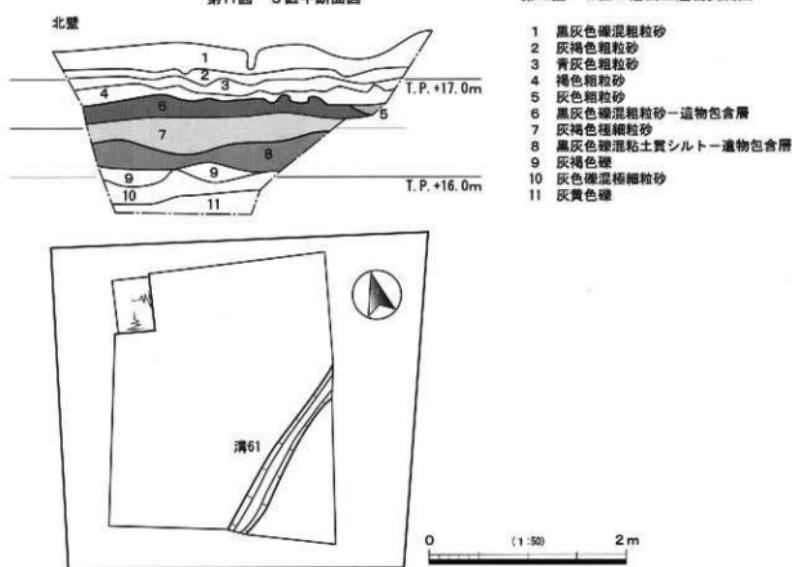


第10図 4区出土遺物実測図

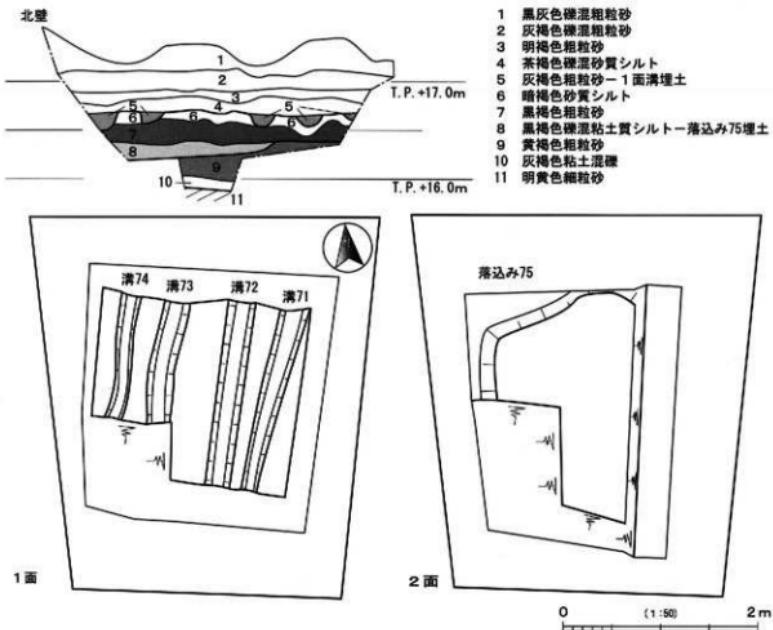


第11図 5区平断面図

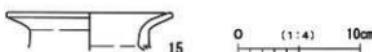
第12図 5区7層出土遺物実測図



第13図 6区平断面図



第14図 7区平断面図



第15図 7区落込み75出土遺物実測図

《6区》

6区の現地表面はT.P. +17.2~17.5mを測る。地表下70cm前後で6層(黒灰色礫混粗粒砂)に至る。この層上面(T.P. +16.8m前後)で、溝1条(溝61)を検出した(1面)。溝61は北東-南西方向にのびるもので、長さ2.0mを検出し、幅20cmを測る。以下7層(灰褐色極細粒砂)、8層(黒褐色礫混粘土質シルト)が堆積しており、ともに弥生時代後期の土器が出土している。9層(灰褐色礫)は部分的な堆積であり、遺構埋土の可能性がある。

以下は10層(灰色礫混極細粒砂)、11層(灰黄色礫)、12層(灰黄色極細粒砂・地山)があり、地山上面は地表下1.8m(T.P. +16.6m)前後を測る。6区からは図示できる遺物は出土していない。

《7区》

7区の現地表面はT.P. +17.2~17.5mを測る。地表下70cm前後で6層(暗褐色砂質シルト)に至る。この層上面(T.P. +16.6m前後)で、溝4条(溝71~74)を検出した(1面)。いずれも南北方向の溝で、調査区外にのびる。幅は、溝71が20~30cm、溝72が25cm、溝73が25cm、溝74が15cmを測る。以下7層(黒褐色粗粒砂)が厚さ20~30cm程堆積し、9層(黄褐色粗粒砂)に至る。9層上面(T.P. +16.4m前後)では、北~西へ下がる落込み75を検出した。内部からは、弥生時代後期の土器

が出土し、15を図示した。15は壺の口縁部である。口縁端部は丸く收める。生駒西麓産の胎土をもつ。

以下は10層(灰褐色粘土混礫)、11層(明黄色極細粒砂・地山)があり、地山上面は地表下1.6~1.7m(T.P.+15.8m)前後を測る。

第3章　まとめ

今回の調査では、1区あたりの面積は小さいながらも、広範囲にわたって遺跡の様相を明らかにすることができた。各調査区では、地表下0.5~1.0m付近の1面相当層直上までは耕作地であったようで、1面で検出した溝群は農耕に伴うものと考えられる。1面のベース層には、土師器・黒色土器を含むことから、耕作地として開発されたのは奈良~平安時代以降であろう。

2面および3面は大半が落ち込みを検出したのみであったが、弥生時代後期~古墳時代後期の遺物を含んでおり、各面の時期は、2面を古墳時代中~後期、3面を弥生時代後期に比定できる。

調査地の北方200m付近には、古墳時代後期に造営された前方後円墳である郡川西塚古墳・郡川東塚古墳があり、この時期の集落が近辺に存在した可能性を示唆している。

図 版



調査地全景(南西から)



地形測量(北西から)



1区人力掘削(東から)



1区1面全景(南から)



2区1面全景(東から)



2区2面全景(東から)

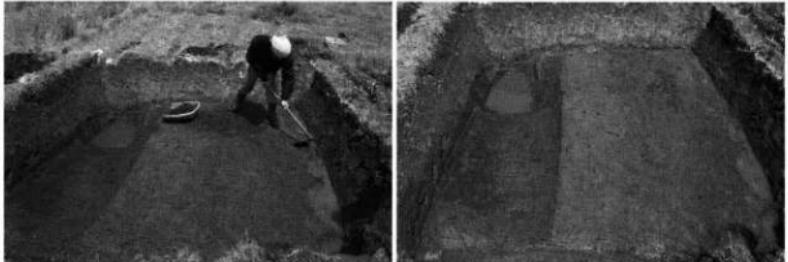


3区機械・人力掘削(東から)



3区1面全景(南から)

図版
2



4区1面遺構検出(南から)



4区1面全景(南から)



4区2面遺構検出・掘削(南から)



4区2面全景(南から)



4区3面全景(南から)



4区北壁実測(南から)



5区1面遺構検出・掘削(北東から)



5区1面全景(南から)



6区1面全景(南から)



6区北壁(南から)



7区1面遠横検出・掘削(南東から)



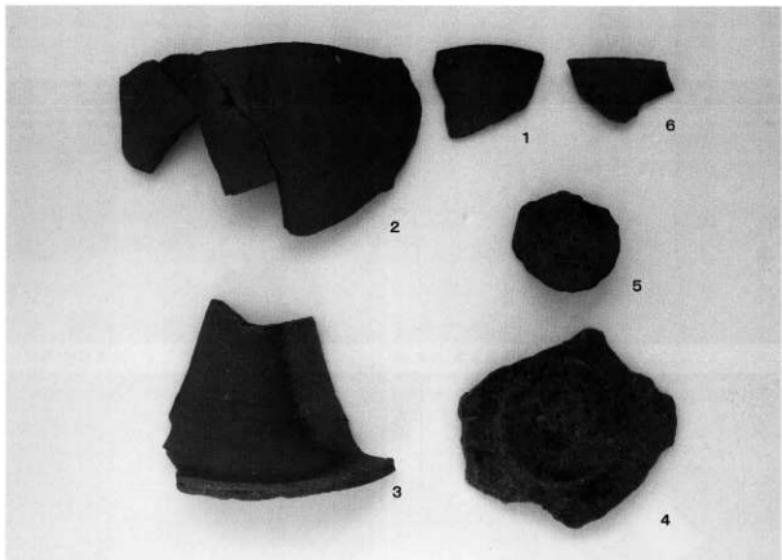
7区1面全景(南から)



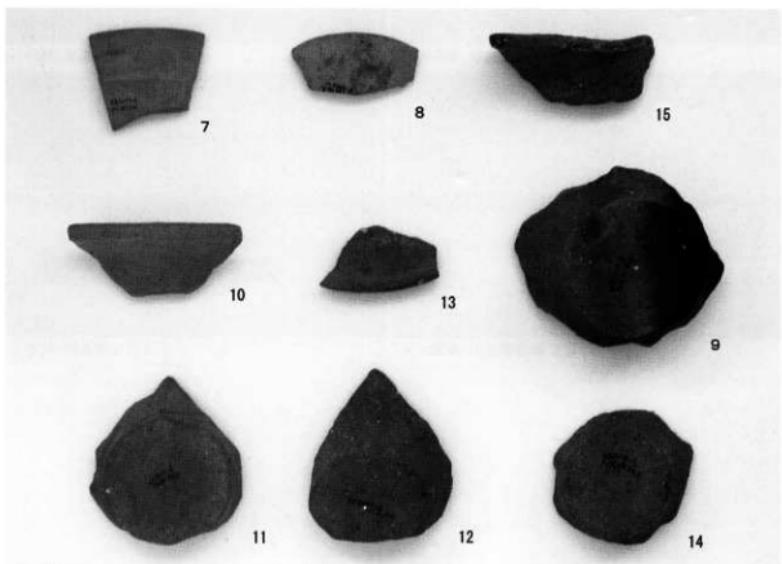
7区2面遠横検出(南東から)



7区2面全景(南から)



1区落込み11(1~3)・2区7層(4・5)・8層(6)出土遺物



3区溝22(7)・4区2層(8)・7層(9)・落込み48(10~13)・5区7層(14)・7区落込み75(15)出土遺物

II 郡川遺跡第7次調査(KR2007-7)

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市黒谷一丁目56番1で実施した(仮称)新高安保育所建設に伴う造成工事に伴う郡川遺跡第7次発掘調査(KR2007-7)の発掘調査報告書である。
1. 本調査は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 調査は当調査研究会の西村公助が担当した。
1. 現地調査の期間は平成19年9月11日に着手し平成19年11月30日に終了した。調査面積は約851.2m²である。
1. 現地調査には、阿部由美子・岩沢玲子・岩本順子・中村百合・吉川一栄の参加を得た。(敬称略、五十音順)
内業整理は下記が参加し、現地調査終了後に着手して平成20年12月29日をもって終了した。
遺物実測—赤松英幸・市森千恵子・永井律子・中村・中野一博・村井俊子・若林節子
遺構図面トレース—木村健明・西村・遺物図面トレース—市森、遺物写真撮影—木村・西村
1. 現地調査および本書作成にあたっては、八尾市教育委員会文化財課ならびに、財団法人八尾市文化財調査研究会職員の協力を得た。
1. 本書の執筆及び編集は西村が行った。

凡　例

1. 遺構名は下記の通りに表示し、遺構番号の前に冠した。
土坑—SK、小穴—SP、溝—SD、河川—NR
1. 遺構番号は、遺構略号を付した後に3桁の算用数字で表現した。3桁の数字の内、上1桁は遺構検出面を表し、それ以下の桁で遺構の検出番号を示す。
1. 遺物実測図の縮尺は、土器は1/4、石器は1/3に統一した。
1. 遺物実測図は、断面の表示によって下記のように分類した。
弥生土器・土師器・瓦器—白、須恵器—黒
1. 出土遺物掲載番号のゴシック体算用数字は、土器を表す。数字の前のSは石器である。

本　文　目　次

第1章　調査概要.....	13
第1節　調査の方法と経過.....	13
第2節　層序.....	13
第3節　検出遺構と出土遺物.....	16
第2章　まとめ.....	50

挿 図 目 次

第1図	1～3区断面図	14	第2図	4～6区断面図	15
第3図	1区第1～3面平面図	17	第4図	1区SD203、SP302、SD301 出土遺物実測図	19
第5図	2区第1～3面平面図	21	第6図	2区NR302、5層 出土遺物実測図	23
第7図	1・2区3面SP301～312 平・断面図	25	第8図	3区第1～4面平面図	26
第9図	3区SD230平・断面図	28	第10図	3区SD230出土遺物実測図(1)	29
第11図	3区SD230出土遺物実測図(2)	30	第12図	3区SD230出土遺物実測図(3)	31
第13図	3区SD230出土遺物実測図(4)	32	第14図	4区第1～3面平面図	40
第15図	4区SD235平・断面図	42	第16図	4区SD134・140、SK202、SD235 出土遺物実測図	42
第17図	5区第1～3面平面図	45	第18図	5区SD239平・断面図	46
第19図	5区SD142・144・147、SD239、 5層出土遺物実測図	46	第20図	6区SD240平・断面図	47
第21図	6区第1～3面平面図	48	第22図	6区SD240、NR101 出土遺物実測図	48

表 目 次

表1	1区第1面溝一覧表	16	表2	1区第2面溝一覧表	17
表3	1区第3面小穴一覧表	19	表4	出土遺物観察表(1)	20
表5	2区第1面溝一覧表	22	表6	2区第2面溝一覧表	22
表7	2区第3面小穴一覧表	23	表8	2区第3面河川一覧表	24
表9	出土遺物観察表(2)	24	表10	3区第1面溝一覧表	26
表11	3区第2面溝一覧表	28	表12	出土遺物観察表(3)	33
表13	出土遺物観察表(4)	34	表14	出土遺物観察表(5)	35
表15	出土遺物観察表(6)	36	表16	出土遺物観察表(7)	37
表17	3区第3面小穴一覧表	38	表18	3区第3面溝一覧表	38
表19	4区第1面溝一覧表	39	表20	4区第2面土坑一覧表	39
表21	4区第2面小穴一覧表	39	表22	出土遺物観察表(8)	41
表23	4区第2面溝一覧表	41	表24	5区第1面溝一覧表	43
表25	5区第2面溝一覧表	43	表26	出土遺物観察表(9)	44
表27	6区第1面溝一覧表	49	表28	6区第2面溝一覧表	49
表29	6区第3面溝一覧表	49	表30	出土遺物観察表(10)	49

図版目次

- 図版1 調査地遠景【河内平野を望む 中央矢印が調査地】(南東から)
調査地周辺【中央は生駒山地】(南西から)
調査前【左上は生駒山地】(北から)
- 図版2 1区第1面(北から) 1区第2面(北から) 1区第3面(北から)
2区第1面(南から) 2区第2面(南から) 2区第3面(南から)
1区S P301~306検出状況(北西から) 2区S P307~312検出状況(東から)
- 図版3 3区第1面(南から) 3区第2面(南から) 3区第3面(南から)
3区S D230(南西から)
- 図版4 3区S D230遺物出土状況(南西から) 3区S D230遺物出土状況(南から)
3区S D230遺物出土状況(南から) 3区第4面(南から)
3区N R401(南東から)
- 図版5 4区第1面(北東から) 4区第2面(北東から) 4区第3面(北東から)
4区S D235(南から) 4区S D235遺物出土状況(南から) 5区第1面(北から)
5区第2面(北から) 5区第3面(北から)
- 図版6 5区S D239(西から) 5区S D239遺物出土状況(西から) 6区第1面(南から)
6区第2面(南から) 6区第3面(南から) 6区S D240(南から)
6区S D240遺物出土状況(北から) 6区S D240遺物出土状況(東から)
- 図版7 S D301出土遺物
- 図版8 S D230出土遺物
- 図版9 S D230出土遺物
- 図版10 S D230出土遺物
- 図版11 S D230出土遺物
- 図版12 4区S K202、S D235、5区S D239、5層、6区N R101出土遺物

第1章 調査概要

第1節 調査の方法と経過

今回の発掘調査は保育所建設に伴うもので、研究会が郡川遺跡内で行った第7次調査にあたる。調査は造成工事部分を対象に851.2m²を行った。工事部分は南北に細長いため、調査地を6区に分けた。調査区は南西側を1区とし、北へ2・3区、南東側を4区とし北へ5・6区と呼称した(本書Iの第2図を参照)。調査にあたっては、市教委の埋蔵文化財調査指針書に従い、現地表下約0.5mを機械掘削し、以下0.8m前後の厚みの地層は人力掘削を行い、遺構の検出に努めた。また、面的な調査終了後、部分的に下層の確認を行った。

調査での地区割りは、調査地の北東に位置する国土地理院第VI系座標点(X=-152.825km, Y=-33.460km)を基点とし、本調査地を包括する東西50m、南北150mの範囲に10mメッシュを設定した。北東隅を基点として、東西方向をアルファベット(東からA～E)、南北方向を算用数字(北から1～15)で表し、1A区～15E区とした(本書Iの第2図を参照)。

調査の結果、縄文時代～鎌倉時代の遺構および遺物の検出があった。出土遺物はコンテナ(縦0.6m×横0.4m×深さ0.2m) 15箱である。

第2節 層序

調査地の現地表面の標高は、5区の南東側が17.7m、3区の北西側が17.2mを測り、南東から北西へ低くなる地形であった。今回の調査では10層の基本層序を確認した。

0層 盛土。

1層 2.5Y3/1黒褐色細粒砂混粘土。近年(平成年代)まで耕されていた作土である。

2層 2.5Y6/1黄灰色細粒シルト質粘土。上面は攪拌を受け、土壤化している。近世に比定でき耕作土である(第1面)。

3層 2.5Y5/4黄褐色細粒砂混粗粒砂。中世～近世の耕作土と思われる。

4層 10YR1/6褐色細粒砂混粘土。上面は攪拌を受け、土壤化している耕作土である。平安～鎌倉時代の遺構を検出した(第1面)。なお、5区と6区では4層の大部分が削られほとんど残っていない。したがって、同区で検出した遺構は5層上面で検出することになった。

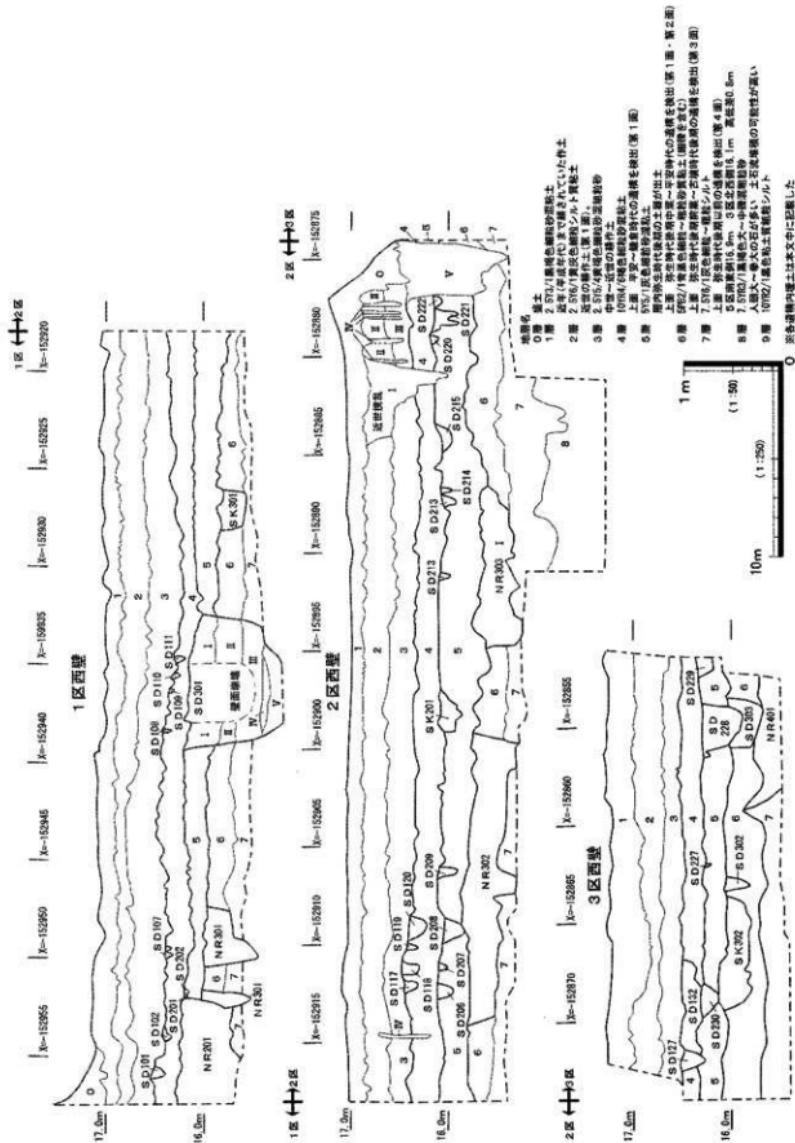
5層 5Y5/1灰色細粒砂混粘土で、層内からは弥生時代後期の土器が出土している。上面は土壤化し、弥生時代後期中葉～平安時代の遺構を検出した(第1面・第2面)。

6層 5PB2/1青黒色細粒～粗粒砂質粘土で、細礫を含む。上面は土壤化している。弥生時代後期前葉～古墳時代後期の遺構を検出した(第3面)。

7層 7.5Y6/1灰色細粒～粗粒シルト。上面は土壤化している。弥生時代後期以前の遺構を検出した(第4面)。上面の標高は、5区の南東側が16.9m、3区の北西側が16.1mを測り、高低差は0.8mある。

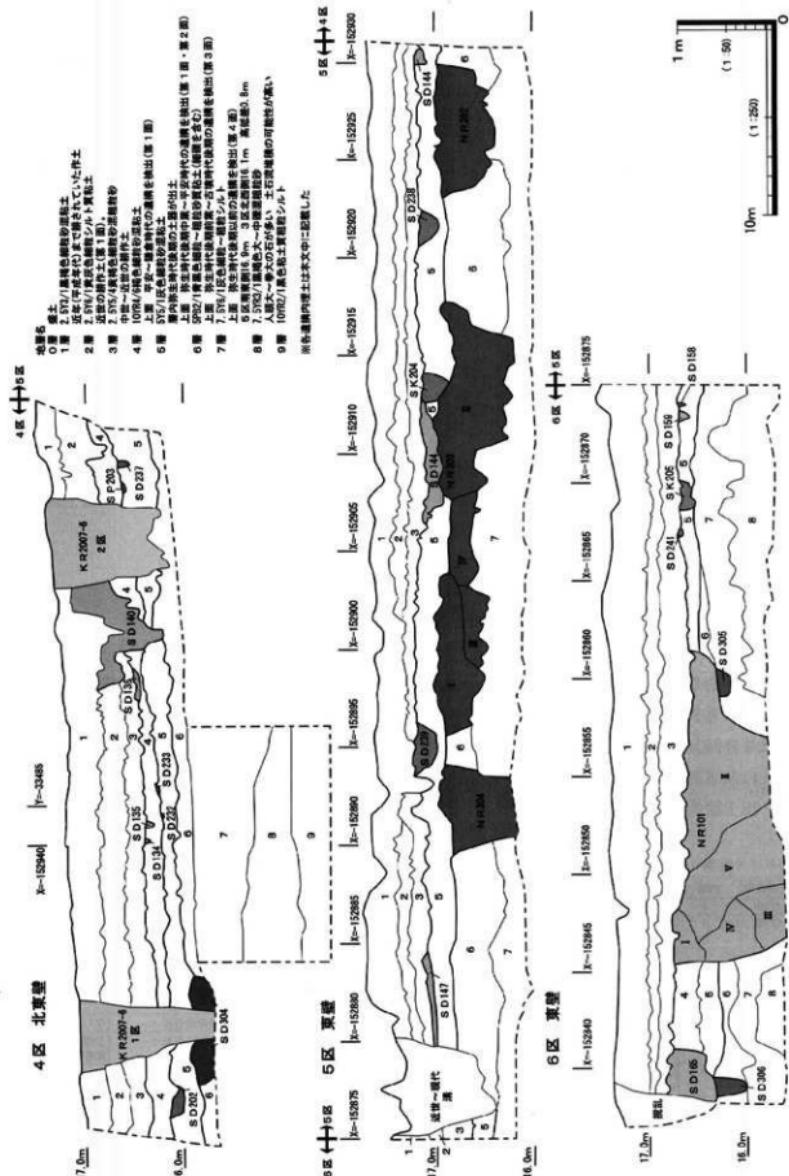
8層 7.5YR3/1黒褐色大～中礫混粗粒砂。人頭大～拳大の石が多く、湧き水が多量にあった。上石流堆積の可能性が高いと考えられる。

9層 10YR2/1黑色粘土質粗粒シルト。



第1圖 1~3區斷面圖

II 郡川遺跡第7次調査(KR2007-7)



第2図 4~6区断面図

第3節 検出遺構と出土遺物

調査の結果、第1面では、平安～鎌倉時代の溝65条(S D101～165)、近世の河川1条(N R101)を、第2面では、弥生時代後期中葉の土坑4基(S K202～205)、小穴5個(S P201～205)、溝9条(S D230・234～241)および、平安時代の土坑1基(S K201)、溝32条(S D201～229・231～233)、河川1条(N R201)を、第3面では、弥生時代後期前葉の土坑2基(S K301・302)、小穴14個(S P301～314)、溝4条(S D302・303・305・306)、河川4条(N R301～304)および占墳時代後期の溝2条(S D301・304)を、第4面では、弥生時代後期前葉以前の河川1条(N R401)を検出した。以下には各地区毎に検出した遺構および遺物を記載する。

1区

第1面

平安～鎌倉時代の溝13条(S D101～113)を検出した。

S D101～113

S D101～113は調査区のほぼ全域で検出した。このうちS D101・102は4区でも検出した。S D101・102・108～111は東西方向に、S D103～107・112・113は南北方向に伸びる。これらは耕作に伴うものと考えられる。S D101～104・106・109・112からは土師器、須恵器、瓦質土器の破片が出土した。なお、検出した各溝の詳細は表1にまとめた。

第2面

平安時代の溝5条(S D201～205)、河川1条(N R201)を検出した。

S D201～205

S D201～205は調査区のほぼ全域で検出した。このうちS D202は4区、S D204は2区でも検出した。S D201・202は東西方向に、S D203～205は南北方向に伸びる。これらは耕作に伴うものと考えられる。各溝からは弥生土器、土師器、須恵器の破片が出土した。このうち図化したものはS D203から出土した1である。

1は須恵器杯蓋で、天井部は丸く、TK10～TK43型式に比定できる。なお、各溝の詳細は表2、出土遺物の詳細は表4にまとめた。

表1 1区第1面溝一覧表

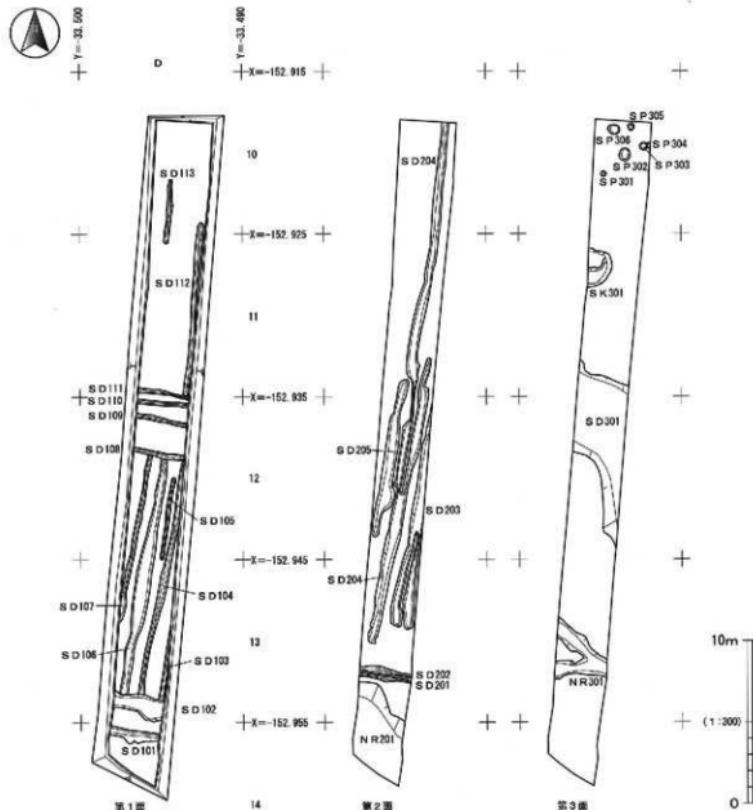
追跡番号	地区	平面形状	幅(m)	断面形状	深さ(m)	埋土	出土遺物
S D101	14C・D	東西方向に直線に伸びる。	0.6	逆台形	0.15	N4/0 灰色細粒～粗粒砂	土師器、須恵器
S D102	13C・B	東西方向に直線に伸びる。S D103・104・106を切る。	0.75	逆台形	0.1	N4/0 灰色細粒～粗粒砂	土師器、須恵器
S D103	13D	南北方向に直線に伸びる。S D102・108を切る。	0.2	逆台形	0.1	10YR4/6褐色細粒砂混粘土	土師器、須恵器
S D104	12・13D	南北方向に直線に伸びる。S D102・108を切られる。	0.2	逆台形	0.1	10YR4/6褐色細粒砂混粘土	土師器、須恵器
S D105	12D	南北方向に直線に伸びる。	0.2	逆台形	0.05	10YR4/6褐色細粒砂混粘土	なし
S D106	12・13D	南北方向に直線に伸びる。S D102・108を切られる。	0.4	逆台形	0.1	10YR4/6褐色細粒砂混粘土	土師器、須恵器、瓦質土器
S D107	12・13D	南北方向に直線に伸びる。S D102・108を切られる。	0.2	逆台形	0.1	10YR4/6褐色細粒砂混粘土	なし
S D108	12D	東西方向に直線に伸びる。S D106・107を切る。	0.2	逆台形	0.1	10YR4/1褐色細粒砂	なし
S D109	12D	東西方向に直線に伸びる。	0.3	逆台形	0.1	10YR4/1褐色細粒砂	土師器、須恵器
S D110	12D	東西方向に直線に伸びる。	0.2	逆台形	0.1	10YR4/1褐色細粒砂	なし
S D111	11・12D	東西方向に直線に伸びる。S D112を切る。	0.3	逆台形	0.15	10YR4/1褐色細粒砂	なし
S D112	10・11D	南北方向に直線に伸びる。S D111を切る。	0.25	逆台形	0.1	10YR3/3褐色細粒砂混粘土	土師器
S D113	10・11D	南北方向に直線に伸びる。	0.2	逆台形	0.1	10YR3/3褐色細粒砂混粘土	なし

NR201

13・14D区で検出した。検出した平面形状は南東～北西方向に直線に伸び、幅は5.8m以上を測る。断面形状は逆台形を呈し、深さは0.6m以上を測る。埋土はN3/0暗灰色細礫混粗粒砂で、遺物の出土はなかった。

表2 1区第2面溝一覧表

遺構番号	地区	平面形状	幅(m)	断面形状	深さ(m)	埋土	出土遺物
S D201	13D	東西方向に直線に伸びる。	0.15	直状形	0.05	N3/1 暗灰色粗粒砂	須恵器
S D202	13C+D	東西方向に直線に伸びる。0.15~1.5		直状形	0.05	N3/1 暗灰色粗粒砂	土器器・須恵器
S D203	12・13D	南北方向に直線に伸びる。0.9		逆台形	0.1	N3/1 暗灰色粗粒砂	土器器・須恵器
S D204	7~13C+D	南北方向に直線に伸びる。0.65		逆台形	0.1	N3/1 暗灰色粗粒砂	弥生土器・土師器
S D205	11・12D	南北方向に直線に伸びる。0.45		逆台形	0.1	N3/1 暗灰色粗粒砂	土器器・須恵器・瓦片



第3図 1区第1~3面平面図

第3面

弥生時代後期前葉の土坑1基(S K301)、小穴6個(S P301~306)、河川1条(N R301)および古墳時代後期の溝1条(S D301)を検出した。

S K301

11D区で検出した。検出した平面形状は半円形を呈し、径1.8mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.3mを測る。埋土は上から10YR2/1黒色粗粒砂混粘土、5Y4/1灰色細粒シルト質粘土で、遺物の出土はなかった。

S P301~306

S P301~306は北部で検出した。円形を呈し、径0.35~1.0mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.08~0.35mを測る。埋土は10YR2/1黒色細粒砂混粘土で、S P301~303・305・306からは弥生時代後期の遺物が出土した。このうち図化したものは、S P302の2である。

2は甕で、弥生時代後期前葉に比定される。小穴のうちS P302・303とS P305・306は建物などを構築した柱穴になる可能性が高い。この小穴群は2区の南部でも検出した。なお、各小穴の詳細は表3、出土遺物の詳細は表4にまとめた。

N R301

11D地区で検出した。南東~北西方向に伸び、西側では南北2条に分かれている。幅2.5mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.5mを測る。埋土は7.5YR6/1褐色細中礫混粗粒砂で、遺物の出土はなかった。なお、この遺構は4区でも検出している。

S D301

11・12D地区で検出した。南東~北西方向に伸び、幅5.0mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.5mを測る。埋土は上からI 7.5YR5/2灰褐色細粒砂混粘土、II 10YR5/6黄褐色5細粒砂混粘土、III 5Y3/1オリーブ黒色細粒砂混粘土、IV 5Y5/2灰オリーブ色細粒砂、V 10YR4/6褐色細粒砂混粘土で、III~V層内からは古墳時代後期の土師器および須恵器の破片が出土した。このうち図化したものは3~20である。

3は土師器甕で、口縁部は「く」の字に屈曲する。体部の内外面はハケナデを施す。4・5は土師器把手付鉢で、牛角状の把手部分である。6~10は須恵器杯蓋。6の天井部は丸みをもつがやや平坦である。7~9の天井部は丸い。11~17は須恵器杯身。11の底部外面にはヘラ記号がある。18~20は須恵器の高杯。18・19は長脚の高杯で、2段にスカシを施す。脚部の外面は回転カキメを施す。これらの須恵器はTK10~TK43型式に比定でき、本遺構の時期は古墳時代後期中葉~後半である。なお、出土遺物の詳細は表4にまとめた。

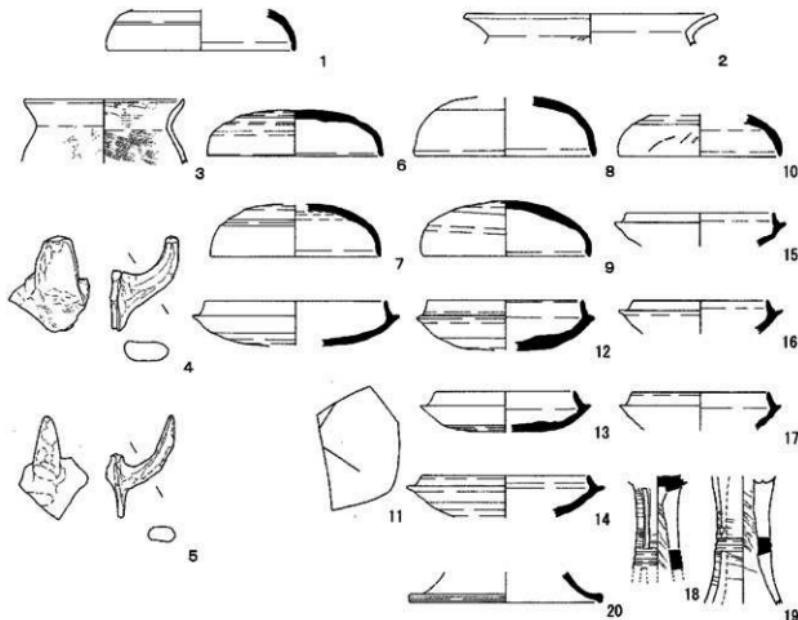
なおS D301は、5層上面から切り込んでいることが断面観察の結果わかった。したがって、この遺構は2面に帰属する。

遺構に伴わない出土遺物

4~6層からは土師器、須恵器、黒色土器などの破片が出土したが、図化できるものはなかった。

表3 1区第3面小穴一覧表

遺構番号	地区	平面形状	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	断面形状	埋土	出土遺物
S P301	100	円形	—	—	0.4	逆台形	0.1	10VR2/1黒色細粒砂 泥粘土 弥生上器
S P302	100	円形	—	—	0.65	逆台形	0.35	10VR2/1黒色細粒砂 泥粘土 弥生上器
S P303	100	円形	—	—	0.4	逆台形	0.1	10VR2/1黒色細粒砂 泥粘土 弥生上器
S P304	100	半円形	—	—	0.35	逆台形	0.1	10VR2/1黒色細粒砂 泥粘土 なし
S P305	100	円形	—	—	0.7	逆台形	0.15	10VR2/1黒色細粒砂 泥粘土 弥生上器
S P306	100	円形	—	—	0.4	逆台形	0.2	10VR2/1黒色細粒砂 泥粘土 弥生上器



SD203 1 SP302 2
SD301 3~20

0 (1:4) 10cm

第4図 1区SD203、SP302、SD301出土遺物実測図

表4 出土遺物觀察表(1)

遺物 番号	遺構	器種	法量 (cm)	形態・調整等	色調	胎土	焼成	備考
1 SD 203	乳頭部 杯蓋 口縁部	口徑15.3	口縁部は内溝し、端部は丸く終わる。口縁部の内外面は回転ナードを施す。天井部内面は回転ナード、外面は回転ヘラケズリを施す。口縁部外側にヘラ状工具による痕跡がある。	1BBS/1 青灰色	1 mm 程度の 砂粒を含む。	良好		
2 SP 302	張生 ^{レターナー} 舞 口縁部	口徑20.3	口縁部は「く」の字に外反する。端部は面を形成する。口縁部2.5mm/4 黄褐色	1 ~ 3 mm の 砂粒を含む。	良好			
3 SD 301	土師器 裏 口縁部	口径13.0	口縁部は「く」の字に外反する。端部はつまみ上げる。口縁部5mm/3 赤褐色	1 ~ 3 mm の 砂粒を含む。	良好			
4 SD 301	土師器 把手付鉢 把手部		牛角状の把手部分である。把手部と体部の内外面はエビナードを施し、指屈圧痕がある。	5YR6/6 橙色	1 ~ 3 mm の 砂粒を含む。	良好		
5 SD 301	土師器 把手付鉢 把手部		牛角状の把手部分である。把手部と体部の内外面はエビナードを施し、指屈圧痕がある。	5YR6/6 橙色	1 ~ 3 mm の 砂粒を含む。	良好		
6 SD 301	乳頭部 杯蓋 口縁部	口径14.3	直立する口縁部。端部は内側に段を有す。天井部は平坦であるが、やや尖りがある。口縁部の内外面は回転ナードを施す。天井部内面は回転ナード、外面は回転ヘラケズリを施す。	1BBS/1 青灰色	1 ~ 2 mm の 砂粒を含む。	良好		
7 SD 301	乳頭部 杯蓋 口縁部	口径13.9	内溝する口縁部。端部は丸く終わる。天井部はない。口縁部5mm/2 灰オリーブ	1 ~ 3 mm の 砂粒を含む。	良好			
8 SD 301	乳頭部 杯蓋 口縁部	口径14.7	内溝する口縁部。端部は丸い。口縁部5mm/1 青灰色	1 mm 程度の 砂粒を含む。	良好			
9 SD 301	乳頭部 杯蓋 口縁部	口径13.6	内溝する口縁部。端部は内側に段を有す。天井部は丸い。口縁部5mm/1 青灰色	1 ~ 2 mm の 砂粒を含む。	良好			
10 SD 301	乳頭部 杯蓋 口縁部	口径13.2	内溝する口縁部。端部は丸く終わる。口縁部の内外面は回転ナードを施す。天井部の内面は回転ナード、外面は回転ヘラケズリを施す。口縁部にはヘラ彫りがある。	1BBS/1 青灰色	1 mm 程度の 砂粒を含む。	良好		
11 SD 301	乳頭部 杯身 口縁部	口径14.8	内溝する口縁部。端部は尖りぎみに丸く終わる。受部は水平に伸びびり尖りぎみに丸く終わる。口縁部および受部の内外面は回転ナードを施す。杯部の内面は回転ナード、外面は回転ヘラケズリを施す。杯部の外側にはヘラ彫りがある。	1BBS/1 青灰色	1 ~ 2 mm の 砂粒を含む。	良好		
12 SD 301	乳頭部 杯身 口縁部	口径12.7	内溝する口縁部。端部は尖りぎみに丸く終わる。受部は水平に伸びびり尖りぎみに丸く終わる。口縁部および受部の内外面は回転ナードを施す。杯部の内面は回転ナード、外面は回転ヘラケズリを施す。	5YR6/1 灰色	1 mm 程度の 砂粒を含む。	良好		
13 SD 301	乳頭部 杯身 口縁部	口径11.4	内溝する口縁部。端部は尖りぎみに丸く終わる。受部は水平に伸びびり尖りぎみに丸く終わる。口縁部および受部の内外面は回転ナードを施す。杯部の内面は回転ナード、外面は回転ヘラケズリを施す。	1BBS/1 青灰色	1 ~ 3 mm の 砂粒を含む。	良好		
14 SD 301	乳頭部 杯身 口縁部	口径13.6	内溝する口縁部。端部は尖りぎみに丸く終わる。受部は水平に伸びびり尖りぎみに丸く終わる。口縁部および受部の内外面は回転ナードを施す。杯部の内面は回転ナード、外面は回転ヘラケズリを施す。	1BBS/1 青灰色	1 ~ 2 mm の 砂粒を含む。	良好		
15 SD 301	乳頭部 杯身 口縁部	口径12.0	内溝する口縁部。端部は尖りぎみに丸く終わる。受部はやや上方に伸びびり尖りぎみに丸く終わる。口縁部および受部の内外面は回転ナードを施す。杯部の内面は回転ナード、外面は回転ヘラケズリを施す。	1BBS/1 青灰色	1 ~ 3 mm の 砂粒を含む。	良好		
16 SD 301	乳頭部 杯身 口縁部	口径10.9	内溝する口縁部。端部は尖りぎみに丸く終わる。受部はやや上方に伸びびり尖りぎみに丸く終わる。口縁部および受部の内外面は回転ナードを施す。	1BBS/1 青灰色	1 ~ 3 mm の 砂粒を含む。	良好		
17 SD 301	乳頭部 杯身 口縁部	口径11.2	内溝する口縁部。端部は尖りぎみに丸く終わる。受部はやや上方に伸びびり尖りぎみに丸く終わる。口縁部および受部の内外面は回転ナードを施す。	1BBS/1 青灰色	1 ~ 2 mm の 砂粒を含む。	良好		
18 SD 301	乳頭部 高杯 脚部		脚部は直立する。脚部の内面は、しばり目がある。外面は擬方柱形を施す。脚部には長方形のスカシ孔があり、3方向あけられている。	1BBS/1 青灰色	1 ~ 2 mm の 砂粒を含む。	良好		
19 SD 301	乳頭部 高杯 脚部		脚部は直立する。脚部の内面は、しばり目がある。外面は回転カラメを施す。脚部には長方形のスカシ孔が3方向あけられており、スカシ孔の部分には逆三角形の認定文?が2箇所ある。回転文を2条施す。	1BBS/1 青灰色	1 mm 程度の 砂粒を含む。	良好		
20 SD 301	乳頭部 高杯 脚部	銘柄15.6	脚部はゆるやかに「ハ」の字に広がる。口縁部は下方にまづみ出し、面を形成する。口縁部内面は回転ナードを施す。	1BBS/1 青灰色	1 mm 程度の 砂粒を含む。	良好		

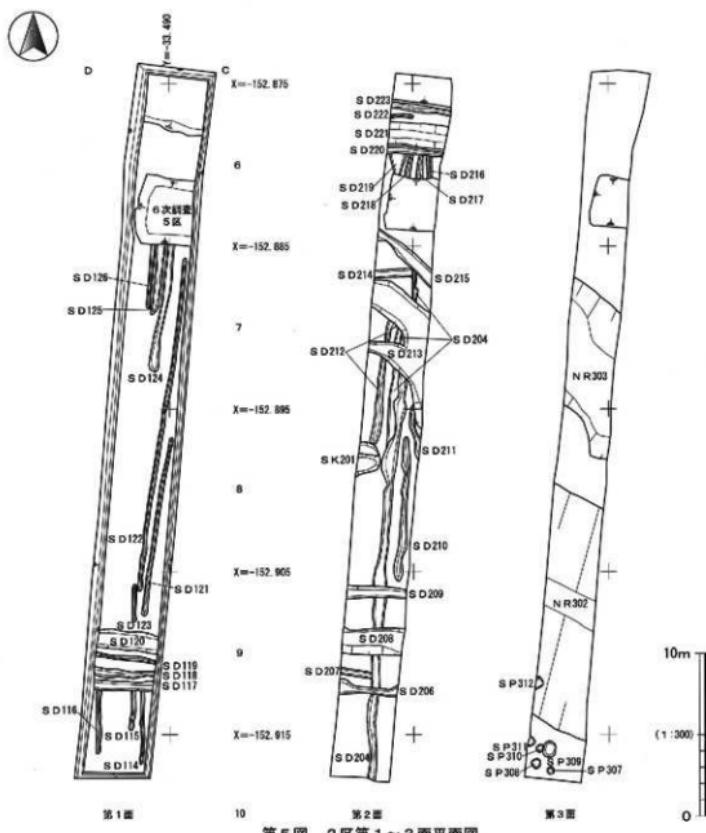
2区

第1面

平安～鎌倉時代の溝13条(S D114～126)を検出した。

S D114～126

S D114～126は全城で検出した。S D117～120は東西方向に、S D114～116・121～126は南北方向に伸びる。これらの溝は耕作に伴うものと考えられる。S D114からは、土師器・須恵器・瓦器、S D115からは須恵器の破片が出土したが、図化できるものはなかった。なお、各溝の詳細は表5にまとめた。



第5図 2区第1～3面平面図

表5 2区第1面溝一覧表

連続番号	地区	平面形状	幅(m)	断面形状	深さ(m)	埋土	出土遺物
S D114	9・10D	南北方向に直線に伸びる。S D117に切られる。	0.2	逆台形	0.1	10Y2/3 單褐色細粒砂混粘土	土師器・須恵器・瓦器
S D115	9D	南北方向に直線に伸びる。S D117に切られる。	0.25	逆台形	0.1	10Y2/3 單褐色細粒砂混粘土	須恵器
S D116	9・10D	南北方向に直線に伸びる。S D117に切られる。	0.3	逆台形	0.1	10Y2/3 單褐色細粒砂混粘土	なし
S D117	9D	東西方向に直線に伸びる。S D114～116に切れる。	0.6	逆台形	0.13	10Y4/1 單灰色細粒砂	なし
S D118	9D	東西方向に直線に伸びる。	0.5	逆台形	0.17	10Y4/1 單灰色細粒砂	なし
S D119	9D	東西方向に直線に伸びる。	0.3	逆台形	0.17	10Y4/1 單灰色細粒砂	なし
S D120	9D	東西方向に直線に伸びる。	0.95	逆台形	0.12	10Y4/1 單灰色細粒砂	なし
S D121	8・9C・D	南北方向に直線に伸びる。	0.2	逆台形	0.07	10Y2/3 單褐色細粒砂混粘土	なし
S D122	7～9C・D	南北方向に直線に伸びる。	0.2	逆台形	0.1	10Y2/3 單褐色細粒砂混粘土	なし
S D123	9D	南北方向に直線に伸びる。	0.2	逆台形	0.05	10Y2/3 單褐色細粒砂混粘土	なし
S D124	6・7C・D	南北方向に直線に伸びる。	0.5	逆台形	0.1	10Y2/3 單褐色細粒砂混粘土	なし
S D125	6・7D	南北方向に直線に伸びる。	0.35	逆台形	0.1	10Y2/3 單褐色細粒砂混粘土	なし
S D126	6・7D	南北方向に直線に伸びる。	0.2	逆台形	0.1	10Y2/3 單褐色細粒砂混粘土	なし

表6 2区第2面溝一覧表

連続番号	地区	平面形状	幅(m)	断面形状	深さ(m)	埋土	出土遺物
S D204	7～13C・D	南北方向に直線に伸びる。	0.65	逆台形	0.1	5Y4/1 灰色粗粒砂	土師器・須恵器
S D206	9D	東西方向に直線に伸びる。	0.35～0.95	逆台形	0.1	5YR6/1 單灰色細粒砂混粘土	なし
S D207	9D	東西方向に直線に伸びる。	0.45	逆台形	0.05	5YR6/1 單灰色細粒砂混粘土	土師器
S D208	9D	東西方向に直線に伸びる。	1.6	逆台形	0.2	5YR6/1 單灰色細粒砂混粘土	なし
S D209	9D	東西方向に直線に伸びる。	0.8	逆台形	0.1	5YR6/1 單灰色細粒砂混粘土	なし
S D210	8・9D	南北方向に直線に伸びる。	0.3	皿状形	0.05	5Y4/1 灰色粗粒砂	なし
S D211	7・8C・D	南北東～北西方向に曲がる。	0.4～0.7	皿状形	0.1	10Y5/1 單灰色細粒砂混粘土	なし
S D212	7・8D	南北方向に直線に伸びる。	0.3	逆台形	0.1	5Y4/1 灰色粗粒砂	赤生土器・土師器
S D213	7・8C・D	南北東～北西方向に直線に伸びる。	A0.5	逆台形	A0.14	10Y5/1 單灰色細粒砂混粘土	赤生土器・土師器
S D214	7D	東西方向に直線に伸びる。	0.5	逆台形	0.15	5YR6/1 單灰色細粒砂混粘土	なし
S D215	6・7C・D	南北東～北西方向に直線に伸びる。	0.7	皿状形	0.06	10Y5/1 單灰色細粒砂混粘土	赤生土器
S D216	6C	南北方向に直線に伸びる。	0.3	皿状形	0.07	10Y5/1 灰色細粒砂混粘土	なし
S D217	6C	南北方向に直線に伸びる。	0.2	皿状形	0.04	10Y5/1 灰色細粒砂混粘土	なし
S D218	6C・D	南北方向に直線に伸びる。	0.25	逆台形	0.08	10Y5/1 灰色細粒砂混粘土	なし
S D219	6D	南北方向に直線に伸びる。	0.4～0.9	皿状形	0.08	10Y5/1 灰色細粒砂混粘土	なし
S D220	6C・D	東西方向に直線に伸びる。	0.5	皿状形	0.05	10Y4/1 灰色細粒砂混粘土	なし
S D221	6C・D	東西方向に直線に伸びる。	1.4	皿状形	0.25	10Y4/1 灰色細粒砂混粘土	なし
S D222	6C・D	東西方向に直線に伸びる。	0.25	逆台形	0.1	10Y4/1 灰色細粒砂混粘土	なし
S D223	6C・D	東西方向に直線に伸びる。	0.35	逆台形	0.14	10Y4/1 灰色細粒砂混粘土	なし

第2面

平安時代の土坑1基(S K201)、溝19条(S D204・206～223)を検出した。

SK201

8D地区で検出した。検出した平面形状は半円形を呈し、径2.0m以上を測る。断面形状は逆台形で、深さ0.23m以上を測る。埋土はN3/0暗灰色細粒砂混粘土で、土師器・須恵器の破片が出土したが、図化できるものはなかった。

SD204・206～223

SD204・206～223は全域で検出した。SD206～209・214・220～223は東西方向に、SD204・210・212・216～219は南北方向に、SD211・213・215は南東～北西方向に伸びる。これらの溝は耕作に伴うものと考えられる。SD204・207・212・213・215からは弥生土器・土師器・須恵器の破片が出土したが、図化できるものはなかった。なお、各溝の詳細は表6にまとめた。

第3面

弥生時代後期前葉の小穴6個(S P307~312)、河川2条(N R302・303)を検出した。

S P307~312

S P307~312は南部で検出した。平面形状は円形(S P307・308・310~312)と梢円形(S P309)があり、径0.4~1.0mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.08~0.25mを測る。埋土は10YR2/1黒色細粒砂混粘土で、S P311からは弥生時代後期の遺物が出土したが図化できるものはなかった。

S P301~303の柱間は1.5mで、東西方向に並ぶ。S P302・305・308・311の柱間は1.5mで、南北方向に並ぶ。S P303・306・307・310の柱間は1.7mで、南北方向に並ぶ。S P309・312の柱間は4.0mで、南北方向に並ぶ。以上が建物などの構築物の柱穴になる可能性が高い小穴である。これらから、周辺に同時期の居住域があったと推測される。なお、各小穴の詳細は表7にまとめた。

N R302・303

N R302は南部で、N R303は中央で検出した。なおN R302・303は5区でも検出している。N R302からは弥生土器の破片が出土した。このうち図化したものは弥生時代後期に比定できる21である。

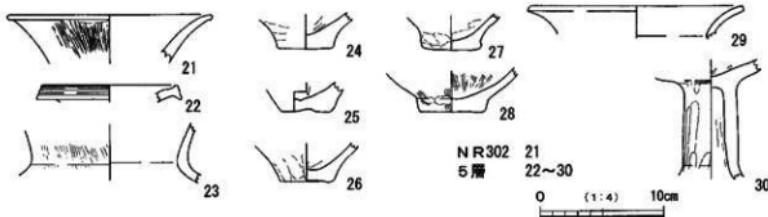
21は壺で、口縁部は外反し、外面には縦方向のヘラミガキを密に施す。なお、各河川の詳細は表8、出土遺物の詳細は表9にまとめた。

遺構に伴わない出土遺物

4層からは弥生土器、土師器、須恵器の破片が、5層からは弥生土器の破片が出土した。このうち図化したものは5層出土の弥生時代後期に比定できる22~30である。

表7 2区第3面小穴一覧表

遺構番号	地区	平面形状	長径 (m)	短径 (m)	径 (m)	断面形状	深さ (m)	埋土	出土遺物
S P307	10D	円形	—	—	0.4	逆台形	0.08	10YR2/1 黒色細粒砂 混粘土	なし
S P308	10D	円形	—	—	0.55	逆台形	0.1	10YR2/1 黑色細粒砂 混粘土	なし
S P309	10D	梢円形	1.0	0.7	—	逆台形	0.17	10YR2/1 黑色細粒砂 混粘土	なし
S P310	10D	円形	—	—	0.45	逆台形	0.1	10YR2/1 黑色細粒砂 混粘土	なし
S P311	10D	円形	—	—	0.6	逆台形	0.18	10YR2/1 黑色細粒砂 混粘土	弥生土器 なし
S P312	9D	円形	—	—	0.7	逆台形	0.25	10YR2/1 黑色細粒砂 混粘土	なし



第6図 2区N R302、5層出土遺物実測図

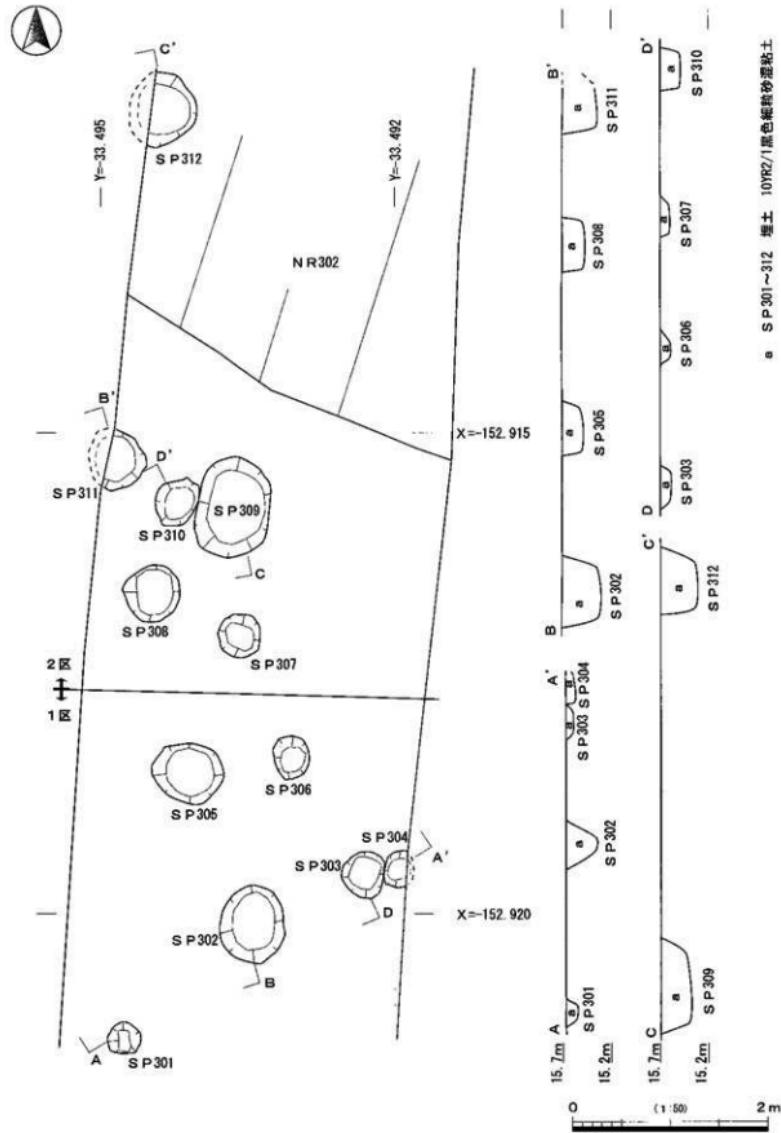
22・23はの壺の口縁部で、22の端面には凹線文を施す。24~28は壺の底部で、25は突出する上げ底である。29はの壺の口縁部である、30は高杯の脚部で、柱状を呈し、中空である。河内V-3様式頃に比定できる。26~30は角閃石を多く含む生駒西麓産の土器である。なお、出土遺物の詳細は表9にまとめた。

表8 2区第3面河川一覧表

遺構番号	地区	平面形状	幅(m)	断面形状	深さ(m)	埋土	出土遺物
NR302	8~100 南東~北西に点線で伸びる。	2区13.5 5区5.0 逆台形	0.55	5TR3/6 硫赤褐色細~中粗混粒砂	弥生時代後期の土器		
NR303	7~8C~D 南東~北西に点線で伸びる。	2区6.5 5~20.0 逆台形	0.5	10YR4/1 黄灰色粗粒砂混相雜	なし		

表9 出土遺物観察表(2)

遺物 番号 図版 番号	遺構	器種	法量 (cm)	形態・調査等	色調	胎土	焼成 度	備考
21 NR 302	弥生土器 壺 口縁部	口径16.3	口縁部は外反する。端部は丸く終わる。口縁部の内面はナデ、外面は縦方向のヘリミガキを施す。	7.5TR5/8 明褐色	1~3mmの良好 砂粒を含む。			
22 5層	弥生土器 壺 口縁部	口径11.0	口縁部は外反する。端部は上下に欹張し罐面を形成する。口縁部の内外面はヨコナゲを施す。端面には刃削文を施す。	10TR7/4 にぶい黄 褐色	1~3mmの良好 砂粒を含む。			
23 5層	弥生土器 壺 口縁部		口縁部は外反する。口縁部の内面はヨコナゲ、外面はハケナゲのちヨコナゲを施す。体部内外面ナゲを施す。	10TR5/6 黄褐色	1~2mmの良好 砂粒を含む。			
24 5層	弥生土器 壺 底部	底径4.6	底部は突出する平底である。体部の内面はナゲを施し、内面の底部にはヘラ状工具による圧絞がある。外面はユビナゲを施す。	内面10YR2/1 黒色 外画7.5YR6/8 暗 色	1~3mmの良好 砂粒を含む。			
25 5層	弥生土器 壺 底部	底径3.9	底部は突出する平底である。体部の内面はナゲを施し、内面の底部にはヘラ状工具による圧絞がある。外画はユビナゲを施す。	内面10YR5/3 にぶ い黄褐色 外画10YR3/1 黑褐色	1~3mmの良好 砂粒を含む。			
26 5層	弥生土器 壺 底部	底径6.0	底部は突出する平底である。体部の内面はハケナゲを施す。外 面は縦方向のヘリミガキを施す。	10TR4/6 黄色	1~3mmの良好 砂粒を含む。(内凹 部を多く含む 生駒西麓産)			
27 5層	弥生土器 壺 底部	底径4.0	底部は突出する平底である。体部の内面はナゲを施し、内面の底部にはヘラ状工具による圧絞がある。外画はユビナゲを施す。	10TR4/4 黄色	1~3mmの良好 砂粒を含む。(角閃 石を多く含む 生駒西麓産)			
28 5層	弥生土器 壺 底部	底径4.8	底部は突出する平底である。体部の内面はユビナゲを施し、内面の底部にはヘラ状工具による圧絞がある。外画はユビナゲを施す。	内面10YR3/1 黑褐 色 外画10YR4/6 暗 色	1~3mmの良好 砂粒を含む。(角閃 石を多く含む 生駒西麓産)			
29 5層	弥生土器 壺 口縁部	口径17.2	口縁部は外反する。端部は面を形成する。口縁部の内外面はヨ コナゲを施す。	10TR4/6 黄色	1~3mmの良好 砂粒を含む。(角閃 石を多く含む 生駒西麓産)			
30 5層	弥生土器 高杯 脚部		脚部は直立する。側面はゆるやかに「ハ」の字に広がる。杯部 の内外面はヘリミガキを施す。基部の内面はしづり目がある。 外画は縦方向のヘリミガキを施す。	10TR4/6 黄色	1~2mmの良好 砂粒を含む。(内凹 部を多く含む 生駒西麓産)			



第7図 1・2区3面SP301~312平・断面図

3区

第1面

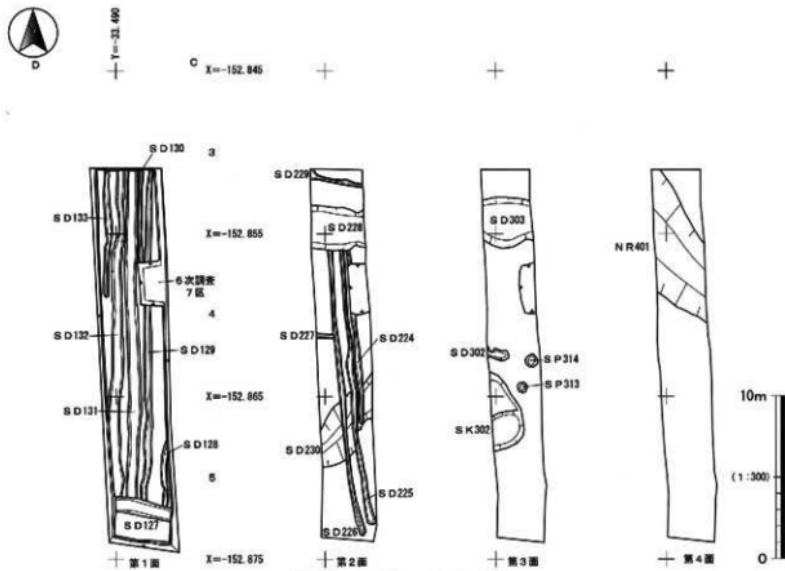
平安～鎌倉時代の溝7条(S D127～133)を検出した。

S D127～133

S D127～133は調査区の全域で検出した。S D128～133は東西方に向いて、S D127は南北方向に伸びる。これらの溝は耕作に伴うものと考えられる。各遺構内からの遺物の出土はなかった。なお、各溝の詳細は表10にまとめた。

表10 3区第1面溝一覧表

遺構番号	地区	平面形状	幅(m)	断面形状	深さ(m)	埋土	出土遺物
S D127	5C・D	東西方向に直線に伸びる。S D128・129・131・132を切る。	0.9 1.28・1.29・1.31・1.32	逆台形	0.2	N45/1 灰色細粒砂	なし
S D128	5C	南北方向に直線に伸びる。S D127を切る。	0.3	逆台形	0.08	N4/0 灰色細粒砂混粘土	なし
S D129	3～5C	南北方向に直線に伸びる。S D127を切られる。	0.45	逆台形	0.12	N4/0 灰色細粒砂混粘土	なし
S D130	3～4C	南北方向に直線に伸びる。	0.3	逆台形	0.05	N4/0 灰色細粒砂混粘土	なし
S D131	3～5C	南北方向に直線に伸びる。S D127を切られる。	0.6	逆台形	0.13	N4/0 灰色細粒砂混粘土	なし
S D132	3～5C・D	南北方向に直線に伸びる。S D127を切られる。	0.75	逆台形	0.13	N4/0 灰色細粒砂混粘土	なし
S D133	3～4D	南北方向に直線に伸びる。	0.3	逆台形	0.05	N4/0 灰色細粒砂混粘土	なし



第8図 3区第1～4面平面図

第2面

平安時代の溝6条(S D224~229)、弥生時代後期の溝1条(S D230)を検出した。

S D224~229

S D224~229は調査区の全域で検出した。S D227~229は東西方向に、S D224~226は南北方向に伸びる。これらは耕作に伴うものと考えられる。各遺構内からの遺物の出土はなかった。なお、各溝の詳細は表11にまとめた。

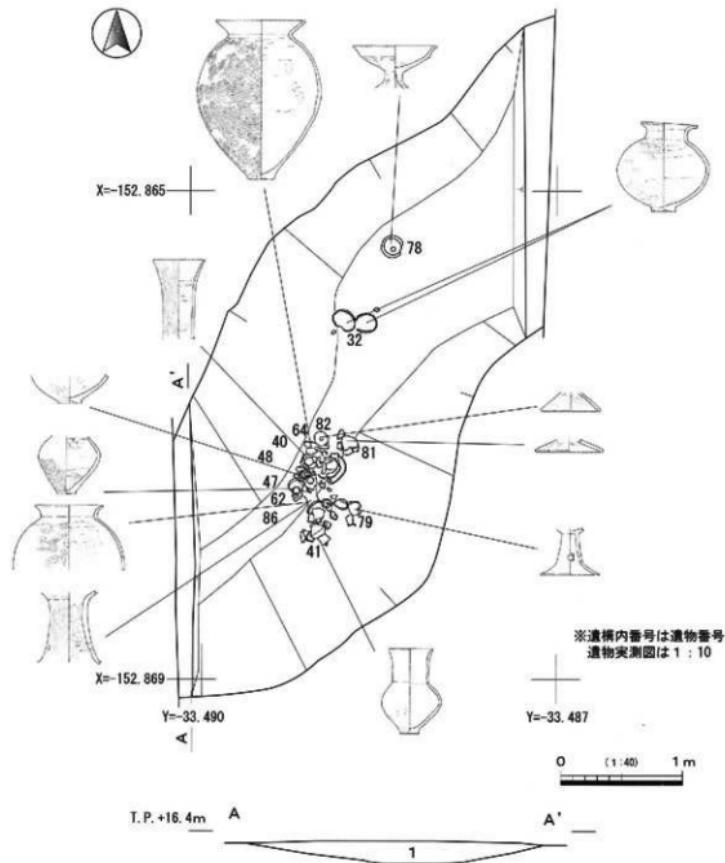
S D230

調査区の南部で検出した。溝のほぼ中央では、弥生時代後期中葉の河内V-3~VI-1様式に比定できる土器が折り重なるように多量(コンテナ10箱程度)に出土した。土器には完形品および、ほぼ完形に復元可能なものがあった。このうち図化したものは31~89・S 1である。

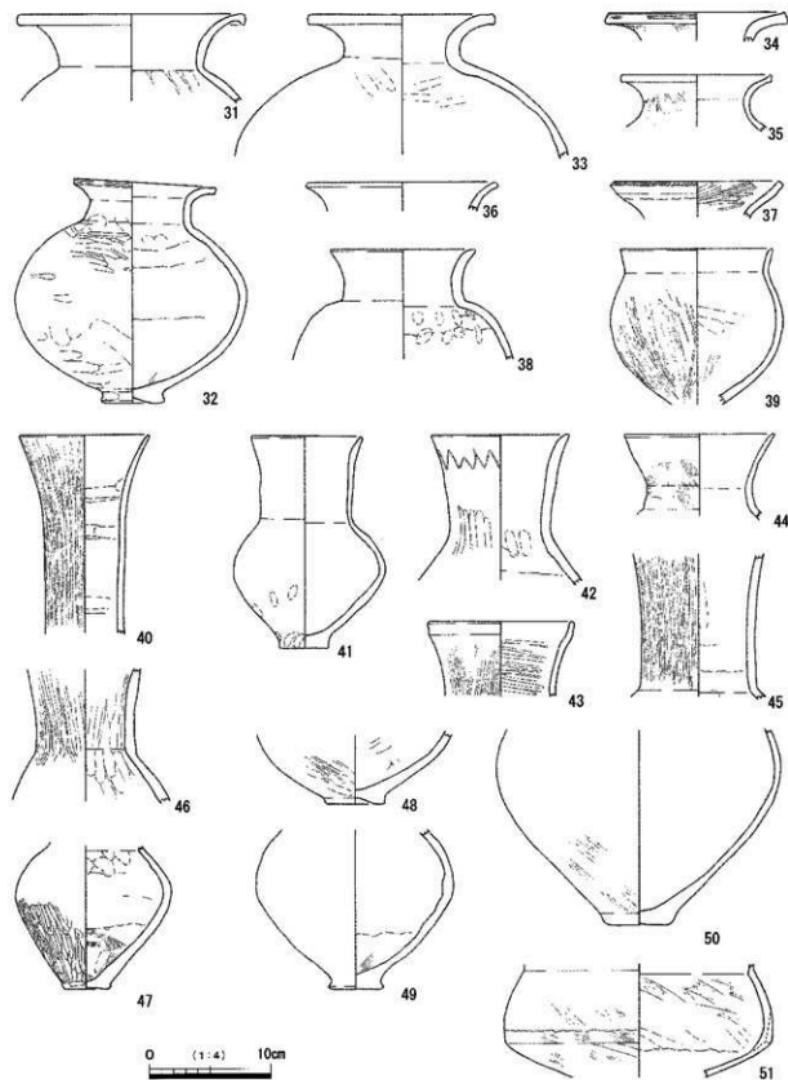
31~51は壺である。31~37は広口壺で、32・33は体部最大径が口径を上回る。34の口縁端部には凹線文を施す。37の口縁端部にはキザミ目を施す。40は細長い頭部から外反する口縁部が付く細頸壺で、河内V-3様式に比定できる。41~43・45~46は長頸壺である。41は完形品で、口縁部は直線的に外側に開く。42の口縁部外面にはヘラ描きの繩齒文を施す。43の口縁部は受口状を呈する。51は体部の破片で、全体の形状は不明なものである。壺として報告するが、鉢の可能性も考えられる。52~69は甕である。52の体部中位には焼成後に1ヶ所の孔があげられている。58・63~68は外面に施すタタキの角度が下位と上位で異なる。61の体部中位には焼成後に孔が2ヶ所あけられている。体部の下位の外面は右上がりのタタキを施すが、中~上位は右上がりのタタキを施したのちユビナデにより丁寧にタタキを消している。64は体部を分割して成形しており、外面には成形時の粘土接合の痕跡が残っている。また、タタキの角度が下位、中位、上位で異なっており、3分割による成形を行っていることが判った。66~68の口縁部は受口状を呈し、河内V-3様式に比定できる。52と64の底部は上げ底である。69の体部は綫長の器形で、口縁端部は上下に拡張した面に凹線文を施す。体部の内面はヘラケズリを、外面は左上がりと綫方向のハケナデを施す。この甕は、河内で出土する一般的なタタキ甕とは器形および調整が異なっている。器形および調整が似ているものには阿波V-3様式の甕が挙げられ(菅原 2000)、他地域からの搬入品である可能性が高い。70・71は鉢。70の口縁部は受口状を呈するやや大形品である。71は小形である。72・73是有孔鉢で、底に貫通する孔が1箇所あいている。74~82は高杯。74~78は外反する口縁部をもつ。74の口縁部外面には凹線文を3条施す。78の脚部は短い。83~86は器台。83の口縁部端面には波状文を施す。84・85のスカシ孔は裾部と脚部の境と脚部の中位に施す。87は手焙形土器で、体部の下位と口縁部に突帯を1条施す。88・89はミニチュア土器。S 1は砥石で、使用したと思われる平らな面が4面認められた。なお、遺構の詳細は表11、出土遺物の詳細は表12~16にまとめた。

表11 3区第2面溝一覧表

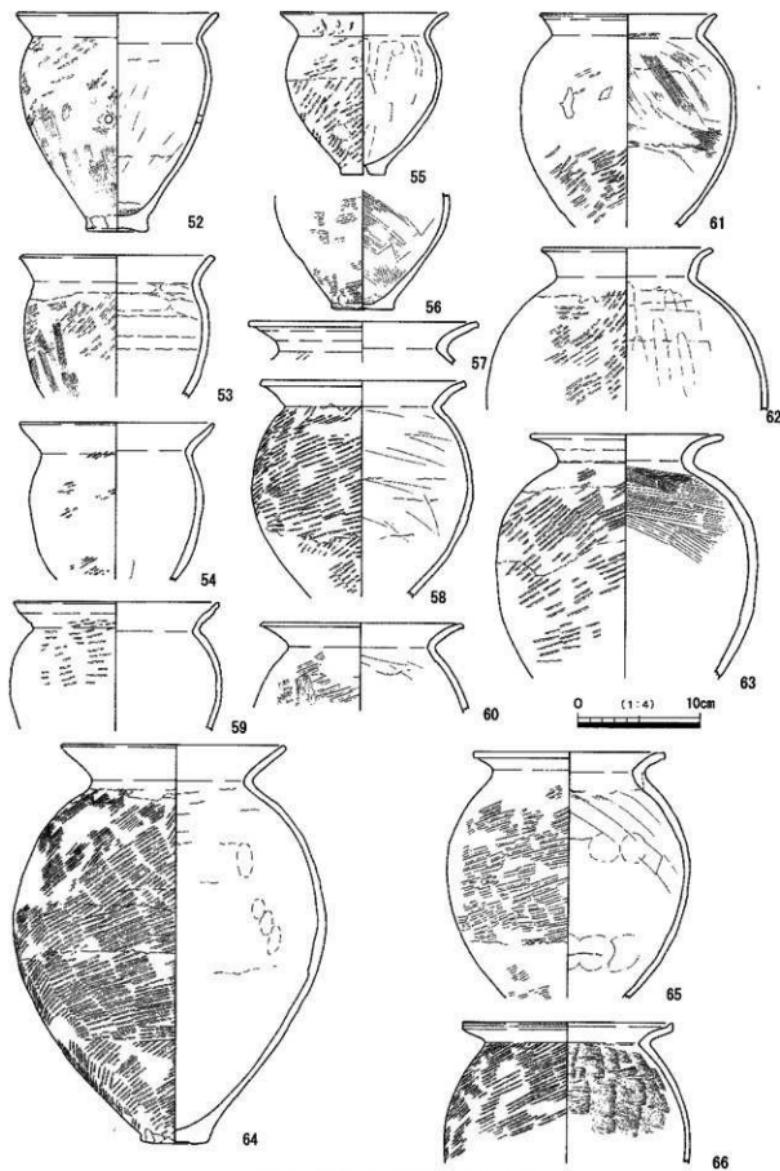
遺構番号	地区	平面形状	幅(m)	断面形状	深さ(m)	埋土	出土物
S D224	4・5C	南北方向に直線に伸びる。	0.45	逆台形	0.18	10Y4/1	灰色細粒砂混粘土 なし
S D225	4・5C	南北方向に直線に伸びる。	0.4	逆台形	0.1	10Y4/1	灰色細粒砂混粘土 なし
S D226	4・5C	南北方向に直線に伸びる。	0.3	逆台形	0.05	10Y4/1	灰色細粒砂混粘土 なし
S D227	4C・D	東西方向に直線に伸びる。	0.3	逆台形	0.08	10Y4/1	灰色細粒砂混粘土 なし
S D228	3・4C・E	東西方向に直線に伸びる。	2.6	逆台形	0.2	5B4/1	暗青色細粒砂混粘土 なし
S D229	3C・D	東西方向に直線に伸びる。	0.25	逆台形	0.1	10Y4/1	灰色細粒砂 なし
S D230	4・5C	西南西～北東方向に直線に伸びる。	2.5	皿状	0.18	N3/0 暗灰色細粒砂混粘土	脊生土器



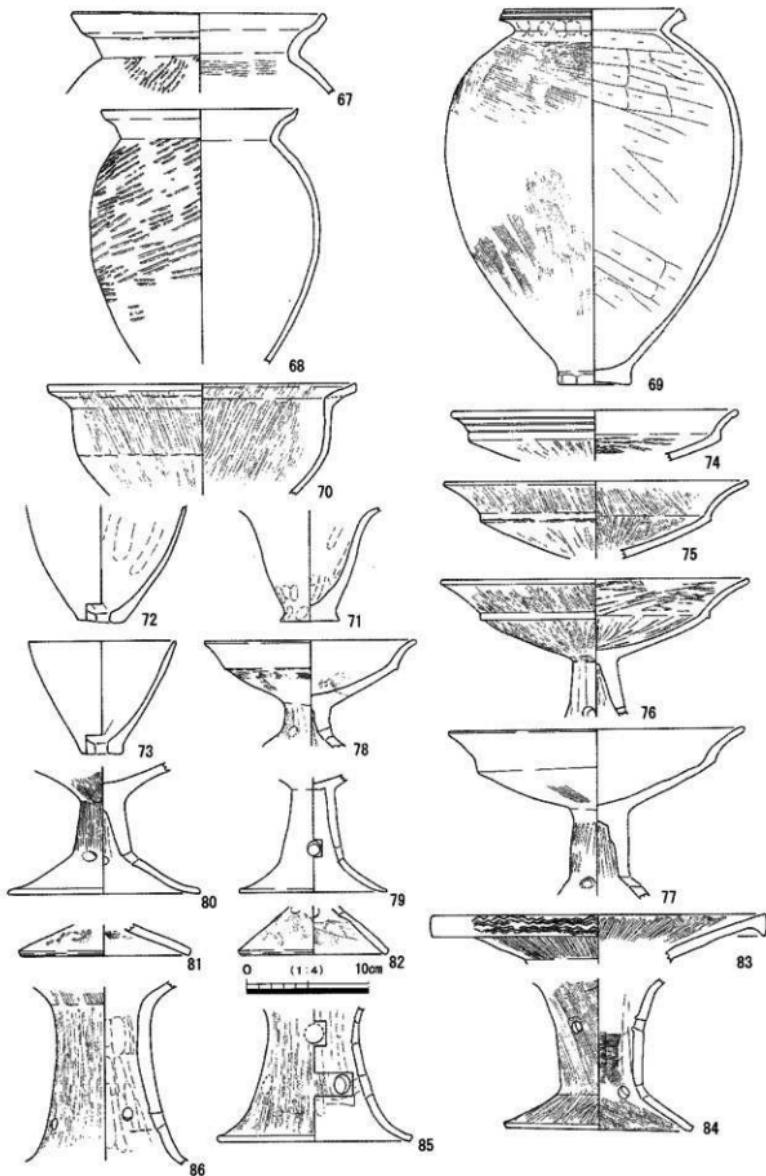
第9図 3区S D230平・断面図



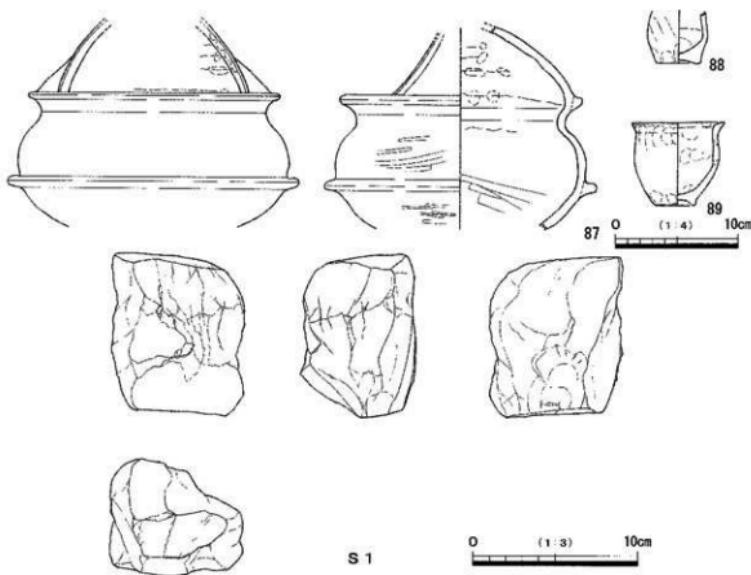
第10図 3区SD230出土遺物実測図(1)



第11図 3区 S D230出土遺物実測図(2)



第12図 3区SD230出土遺物実測図(3)



第13図 3区S D 230出土遺物実測図(4)

第3面

弥生時代後期前葉の土坑1基(S K302)、小穴2個(S P313・314)、溝2条(S D302・303)を検出した。

S K302

4・5C・D地区で検出した。遺構の西側は調査区外に至る。検出した平面形状は半円形を呈し、南北幅は4.5mを測る。断面形状は北に段をもつ逆台形で、深さ0.4mを測る。埋土は上からN3/0暗灰色細粒砂混粘土 10YR4/1褐色細粒砂混粘土で、弥生土器の破片が出土したが、図化できるものはなかった。

S P313・314

調査区のほぼ中央で検出した。小穴の間隔は1.8mを測り、これらは、建物などの施設に伴う柱穴である可能性が高いと考えられる。各小穴からの遺物の出土はなかった。なお、各小穴の詳細は表17にまとめた。

S D302・303

S D302は調査区の中央で、S D303は北部で検出した。東西方向に伸び、溝からの遺物の出土はなかった。なお、各溝の詳細は表18にまとめた。

表12 出土遺物観察表(3)

遺物番号 因版番号	遺構	基盤	法量 (cm)	形態・調査等	色調	釉土	構成	備考
31 SD 230	赤生土器 壺 口縁部	口径18.2	口縁部は体罰から弧曲し直立ぎみに外へ伸びた後外反する。壺 体部は下方へまみ出し面を形成する。口縁部内外面はヨコナダ を施す。体部の内外面はユビナダを施す。口縁部外側には部分的に 赤色顔料を施していい。口へ体部の内外面には部分的に 黒色がある。	7.5VR3/8 明褐色	1~4mmの 砂粒を含む。 (角閃石 を多く含む 牛飼田層底)	良好		
32 SD 8 230	赤生土器 壺 口縁部	口径11.6 高さ18.4 底径6.1 体部最大 径18.9	底部は突出する上げ底である。体部は腰長の球形である。口縁 部は折出で外反する。壺部は下方にまみ出し面を形成する。体部の内面はナダ 色を施し、内部の底面にはヘラ状工具による圧痕がある。外表面は 横方向へのハミガキのユビナダを施す。口縁部は内外面とも ヨコナダを施す。壺部には墨線文を施す。体部の外表面には、 赤色顔料を部分的に塗布している。	内面10YR3/1 黑褐色 色 外面10YR4/2 褐色	1~3mmの良好 砂粒を含む。 (角閃石 を多く含む 牛飼田層底)	良好		
33 SD 6 230	赤生土器 壺 口縁部	口径15.3	体部は横長の球形になると思われる。壺部は「く」の字に型 くし外反する。壺部は下方へまみ出し面を形成する。口縁部 の内外面はヨコナダを施す。体部の内外面はユビナダを施す。	7.5VR4/4 褐色	1~4mmの 砂粒を含む。 (角閃石 を多く含む 牛飼田層底)	良好		
34 SD 8 230	赤生土器 壺 口縁部	口径14.2	口縁部は外反する。壺部は上下につまみ出し面を形成する。口縁部は「く」 の字に型くし外反する。壺部は下方へまみ出し面を形成する。口縁部 の内面はヨコナダ、外表面は経方向のハミガキを施す。壺部 には墨線文を施す。	7.5VR8/6 淡黄褐色	1~2mmの良好 砂粒を含む。	良好		
35 SD 230	赤生土器 壺 口縁部	口径 12.25	口縁部は体部からゆるやかに曲がり外反する。壺部は上方へつ まみ出し面を形成する。口縁部内面はヨコナダ、外表面は左上が りのハケナダのちヨコナダを施す。体部の内外面はユビナダを 施す。	7.5VR5/8 明褐色	1~2mmの良好 砂粒を含む。 (角閃石 を多く含む 牛飼田層底)	良好		
36 SD 230	赤生土器 壺 口縁部	口径15.2	口縁部は屈曲し外反する。壺部は面を形成する。口縁部は内外 面とともにヨコナダを施す。壺部には外面上に墨線文を施す。	7.5VR5/8 明褐色	1~3mmの 砂粒を含む。 (角閃石 を多く含む 牛飼田層底)	良好		
37 SD 8 230	赤生土器 壺 口縁部	口径13.2	口縁部は内湾する。壺部は面を形成する。口縁部の内面は右上 がりのハミガキ、外表面はヨコナダを施す。口縁部外側には墨 線文、壺部には刻み月を施す。	7.5VR5/8 明褐色	1~2mmの良好 砂粒を含む。 (角閃石 を多く含む 牛飼田層底)	良好		
38 SD 8 230	赤生土器 壺 口縁部	口径11.6	体部は欠損しているが、球形になると思われる。口縁部は体部 からゆるやかに曲がり直立ぎみに外へ伸びる。壺部は外につま み出し丸く終わる。口縁部内外面はヨコナダを施す。体部の内 面はユビナダを施す。粘土接合の痕跡がある。外表面はユビナダ を施す。	7.5VR5/6 明褐色	1~5mmの良好 砂粒を含む。 (角閃石 を多く含む 牛飼田層底)	良好		
39 SD 8 230	赤生土器 壺 口縁部	口径12.0 体部最大 径14.0	体部は球形である。口縁部は体部からゆるやかに曲がり直立ぎ みに外へ伸びる。壺部は丸く終わる。口縁部内外面 はヨコナダを施す。体部の内外面は経方向へのハミガキ後、ユ ビナダを施す。	10VR5/8 黄褐色	1~4mmの良好 砂粒を含む。 (角閃石 を多く含む 牛飼田層底)	良好		
40 SD 8 230	赤生土器 壺 口縁部	口径10.4	腰長い瓶形から口縁部は外反する。壺部は丸く終わる。口縁部 の内面はユビナダ、外表面は経方向のハミガキを施す。	10VR7/4 に赤い 黃褐色	1~2mmの良好 砂粒を含む。	良好		
41 SD 8 230	赤生土器 壺 充形 体部最大 径12.25	口径 8.7 底径12.0 高さ3.75 体部最大 径12.25	体部は横長の球形である。口縁部は直線的に外側へ擴ぐ。壺部 は丸く終わる。口縁部の内面は経方向のハミガキの ヨコナダを施す。口縁部の外側の上位は左上がりのハケ ナダのちヨコナダを施す。下位は経方向のハミガキを施す。 体部の内面はユビナダ、外表面は経方向へのハミガキを施す。 体部の外表面は経方向のハミガキを施す。壺部の外表面にはヘラ彫 きの墨痕文を施す。口へ体部の外表面には部分的に墨面がある。	7.5VR5/8 明褐色	1~3mmの良好 砂粒を含む。 (角閃石 を多く含む 牛飼田層底)	良好		
42 SD 8 230	赤生土器 壺 口縁部	口径11.1	口縁部は体部からゆるやかに曲がり直立ぎみに外へ伸びる。壺 部は丸く終わる。口縁部の内面は経方向のハミガキの ヨコナダを施す。口縁部の外側の上位は左上がりのハケ ナダのちヨコナダを施す。下位は経方向のハミガキを施す。 体部の内面はユビナダ、外表面は経方向へのハミガキを施す。体 部の外表面には粘土接合の痕跡がある。口縁部の外表面にはヘラ彫 きの墨痕文を施す。口へ体部の外表面には部分的に墨面がある。	7.5TR1/1 褐灰色	1~3mmの良好 砂粒を含む。 (角閃石 を多く含む 牛飼田層底)	良好		
43 SD 230	赤生土器 壺 口縁部	口径11.7	口縁部は直線的に外側へ伸びる。壺部は上方につまみ出し面 を施す。外表面は墨面を施す。口縁部の内面は経方向へのハミガ キのヨコナダを施す。口縁部の外側の上位は左上がりのハケ ナダのちヨコナダを施す。下位は経方向のハミガキを施す。体 部の内面はユビナダ、外表面は経方向へのハミガキを施す。口 縁部の外表面はヨコナダを施す。	10VR4/8 赤色	1~3mmの良好 砂粒を含む。 (角閃石 を多く含む 牛飼田層底)	良好		

表13 出土遺物観察表(4)

遺物 番号 図版 番号	遺構	器種	法量 (cm)	形態・調整等	色調	胎土	焼成	備考
44 SD 230	弥生土器 甕 口縁部	口径 12.2		口縁部は直線的に上外カへ伸びる。縁部は丸く終わる。口縁部の内面はヨコナデ、外面は左上がりのハケナデ後ヨコナデを施す。	7.5TR5/6 暗褐色	1 ~ 3 mm の 砂 粒 を 含む。 (角閃石 を多く含む 生駒西麓層)		
45 SD 230	弥生土器 甕 口縁部	直立する頸部。頸部の内面はヨコナデを施す。外面は縦方向のヘラミガキを施す。内面には粘土接合の痕跡がある。			7.5TR5/6 明褐色	1 ~ 3 mm の 砂 粒 を 含む。 (角閃石 を多く含む 生駒西麓層)		
46 SD 230	弥生土器 甕 口縁部	口縁部は直線的に上外カへ伸びる。体部は球形になると思われる。口縁部の内面は縦方向のヘラミガキのちヨコナデ、外面は縦方向のハケナデ後ヘラミガキを施す。体部の内面はヨコナデ、外面は紙打形のヘラミガキを施す。			7.5TR5/6 明褐色	1 ~ 3 mm の 砂 粒 を 含む。 (角閃石 を多く含む 生駒西麓層)		
47 SD 9 230	弥生土器 甕 口縁部	底径3.6 体部最大 径12.7		底部は突出する平底である。体部は綾状の球形で、体部最大径は上位にある。体部の内面はヨコナデとハケナデを施す。外面は縦方向のヘラミガキを施す。	内面10YR3/1 黑褐色 外側10YR4/6 褐色	1 ~ 3 mm の 砂 粒 を 含む。 (角閃石 を多く含む 生駒西麓層)		
48 SD 230	弥生土器 甕 口縁部	底径 4.6		底部は突出する上位底である。体部の内面はナデを施し、内面の底部にはヘラミ工具による圧痕がある。外面はヘラミガキのちヨコナデを施す。	10YR4/6 褐色	1 ~ 3 mm の 砂 粒 を 含む。 (角閃石 を多く含む 生駒西麓層)		
49 SD 9 230	弥生土器 甕 口縁部	直径 3.8 体部最大 径16.0		底部は突出する平底である。体部は横擴の球形である。底部～体部の内面はヨコナデを施す。底部にはヘラミ工具による圧痕がある。底部～体部の外側はヨコナデを施す。	7.5YR4/6 褐色	1 ~ 2 mm の 砂 粒 を 含む。 (角閃石 を多く含む 生駒西麓層)		
50 SD 230	弥生土器 甕 口縁部	直径 6.5 体部最大 径23.0		底部は突出する平底である。体部は横擴の球形である。底部～体部の内面はヨコナデ、外面はヘラミガキを施すと思われるが、底部延長のため調整は不明瞭である。	7.5YR4/3 褐色	1 ~ 3 mm の 砂 粒 を 含む。 (角閃石 を多く含む 生駒西麓層)		
51 SD 230	弥生土器 甕 口縁部	体部最大 径21.7		浅い体部下位から直角に内湾する上位に至る。口縁部は欠損しており不明である。体部の内面はハケナデのちヨコナデを施す。体部の外側はヨコナデのちナデを、上位はヨコナデのちヨコナデを施す。体部内面に粘土接合の痕跡がある。また、外側の粗面部に粘土の内格を施す。	7.5YR5/6 明褐色	1 ~ 3 mm の 砂 粒 を 含む。 (角閃石 を多く含む 生駒西麓層)		
52 SD 9 230	弥生土器 甕 口縫～底 部	口径 14.8 高さ 17.9 体部最大 径5.0 底径 5.5 体部 径15.5		底部は突出する上位底である。瓶型の器形で体部の最大径は上位にある。口縫部は「く」の字に屈曲し外反する。縁部は面を形成する。口縫部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はヨコナデを施し、ヘラミ工具による圧痕と焼成の痕跡がある。体部の下位～中位の外側は左上がりのタタキのち縦方向のハケナデを施し、タタキはハケナデにより消されている。上位の外側は右上がりのタタキを施す。底部の内面はヨコナデを施し、指輪印の痕跡がある。体部の小口の外側には煤が付着している。また、中位には焼成後に1ヶ所の孔があけられている。	7.5YR4/6 褐色	1 ~ 4 mm の 砂 粒 を 含む。 (角閃石 を多く含む 生駒西麓層)		
53 SD 230	弥生土器 甕 口縫部	口径 13.0 体部最大 径15.0		口縫部は「く」の字に屈曲し外反する。縁部は面を形成する。口縫部の内外面はヨコナデを施す。体部の内山はヨコナデを施し、粘土接合の痕跡がある。体部の中位の外側は左上がりのタタキのち縦方向のハケナデを施し、タタキはハケナデにより消されている。上位の外側は右上がりのタタキを施す。底部～口縫部の外側には部分的に黒垢がある。体部の中位の外側には洗が付着している。	7.5YR5/6 明褐色	1 ~ 3 mm の 砂 粒 を 含む。 (角閃石 を多く含む 生駒西麓層)		
54 SD 230	弥生土器 甕 口縫部	口径 13.0 体部最大 径14.1		口縫部は「く」の字に屈曲し外反する。縁部はつまみ上げ丸く終わる。口縫部の内外面はヨコナデを施す。底部の内面はヨコナデを施し、ヘラミ工具による圧痕がある。体部の外側は右上上がりのタタキを施す。底部～口縫部の外側には部分的に黒垢がある。	2.5YR5/6 明褐色	1 ~ 4 mm の 砂 粒 を 含む。 (角閃石 を多く含む 生駒西麓層)		

表14 出土遺物観察表(5)

遺物 番号 図版 番号	遺構	器種	法量 (cm)	形態・調整等	色調	地土	焼成	備考
55 9	S D 230	弥生土器 甕 口縁部	口径 13.6 脚高 13.3 底径 3.4 体部最大 径 12.6	底部は突出する平底である。瓶長の器形で体部の最大径は上位にある。口縁部は「く」の字に屈曲し外反する。端部は丸く終る。口縁部の内面はヨコナデ、外面は右上がりのタタキのちヨコナデを施す。体部の内面はヨコナデを施し、ヘラ状工具による圧痕がある。体部の外側は左上がりのタタキを施す。底部の内外面はユビナデを施し、指壓痕の痕跡がある。	10YR6/4にぶい黄 10YR6/4にぶい黄	1 ~ 3 mm の 砂 粒 を 含 む。(角閃石 を多く含む 牛胸西麓)	良好	
56	S D 230	弥生土器 甕 底部	直径 5.1	底部は突出する平底である。体部の下位以上は欠損しているため、形状は不明である。体部の内面にはヘケナデを施す。体部の外側は右上がりのタタキを施す。底部の内外面はヨコナデを施し、指壓痕の痕跡がある。体部の外側には部分的に黒斑がある。	7.5YR5/8 明褐色	1 ~ 3 mm の 砂 粒 を 含 む。(角閃石 を多く含む 牛胸西麓)	良好	
57	S D 230	弥生土器 甕 口縁部	口径 18.0	口縁部は外反する。端部は下方につまみ出し面を形成する。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部内面はユビナデ、外側は右上がりのタタキを施す。	7.5YR4/6 褐色	1 ~ 2 mm の 砂 粒 を 含 む。(角閃石 を多く含む 牛胸西麓)	良好	
58 9	S D 230	弥生土器 甕 口縁部	口径 16.3 体部最大 径 18.0	体部は瓶長の器形になると思われる。口縁部は瓶面し外反する。端部は下方につまみ出し面を形成する。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面は左上がりのタカナデ、外側は右上がりのタタキを施す。タタキの角度は下位と上位で異なる。体部の外側には粘土接合の痕跡がある。	7.5YR6/6 褐色	1 ~ 3 mm の 砂 粒 を 含 む。(角閃石 を多く含む 牛胸西麓)	良好	
59	S D 230	弥生土器 甕 口縁部	口径 16.5 脚高 17.2	底部は瓶長の器形になるとと思われる。口縁部は「く」の字に屈曲し外反する。端部は上方につまみ出し面を形成する。口縁部の内面はヨコナデ、外側は右上がりのタカナデを施す。体部の内面はヨコナデ、外側は右上がりのタタキを施す。タタキの角度は下位と上位で異なる。	7.5YR4/4 浅褐色	1 ~ 3 mm の 砂 粒 を 含 む。	良好	
60	S D 230	弥生土器 甕 口縁部	口径 16.0	口縁部は「く」の字に屈曲し外反する。端部は瓶面を形成する。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面は左上がりの板ナデを施す。外側は右上がりのタタキ後左上がりのヨコナデを施す。	7.5YR5/6 明褐色	1 ~ 3 mm の 砂 粒 を 含 む。(角閃石 を多く含む 牛胸西麓)	良好	
61 9	S D 230	弥生土器 甕 口縁部	口径 14.6 体部最大 径 17.1	瓶長の器形で体部の最大径は上位にある。口縁部は「く」の字に屈曲し外反する。端部は丸く終わる。口縁部の内面にはヨコナデを施す。口縁部の内面には粘土接合の痕跡がある。体部の下位の内面にはヨコナデを施す。粘土接合の痕跡がある。体部の下位の外側は右上がりのタタキを施す。中・上位は右上がりのタタキのちヨビナデを施す。タタキはヨビナデにより消されている。体部の中位の外側には部分的に黒斑がある。また、中位には既成孔が2ヶ所開けられている。	7.5YR4/6 褐色	1 ~ 3 mm の 砂 粒 を 含 む。(角閃石 を多く含む 牛胸西麓)	良好	
62	S D 230	弥生土器 甕 口縁部	口径 13.6 体部最大 径 22.8	口縁部は屈曲し外反する。端部は丸く終わる。口縁部の内面には粘土接合の痕跡がある。外側は右上がりのタタキを施す。口縁部は内外面とともにヨコナデを施す。体部の外側にはヨコナデを施す。体部中位の外側には煤が付着している。	10YR4/6 褐色	1 ~ 3 mm の 砂 粒 を 含 む。(角閃石 を多く含む 牛胸西麓)	良好	
63	S D 230	弥生土器 甕 口縁部	口径 15.6	体部は瓶長の器形になるとと思われる。口縁部は屈曲し外反する。端部は丸く終わる。口縁部の内面はヨコナデを施す。外側には粘土接合の痕跡がある。体部の内面は横方向と左上がりのハケナデ、外側は右上がりのタタキを施す。体部の中位の外側には煤が付着している。	7.5YR5/8 明褐色	1 ~ 3 mm の 砂 粒 を 含 む。(角閃石 を多く含む 牛胸西麓)	良好	
64 9	S D 230	弥生土器 甕 完形	口径 17.9 脚高 32.7 底径 5.3 体部最大 径 25.5	体部は突出する平底である。瓶長の器形である。口縁部は屈曲し外反する。端部は丸く終わる。体部の内面はヨビナデ、外側はヨビナデを施す。内面には粘土接合の痕跡がある。外側は基本的に右上がりのタタキを施す。タタキの方向は下位、中位、上位で少し角度が変わる。口縁部は内外面とともにヨコナデを施す。体部の中位の外側には煤が付着している。	10YR3/1 黒褐色 10YR4/6	1 ~ 4 mm の 砂 粒 を 含 む。(角閃石 を多く含む 牛胸西麓)	良好	
65 9	S D 230	弥生土器 甕 口縁部	口径 15.7 体部最大 径 19.9	体部は瓶長の器形である。口縁部は「く」の字に屈曲し外反する。端部は瓶面を形成する。口縁部の内面はヨコナデを施す。体部の内面は左上がりのハケナデを施す。外側は右上がりのタタキを施す。体部の外側にはヨコナデを施す。体部の中位の外側には煤が付着している。	7.5YR5/6 明褐色	1 ~ 3 mm の 砂 粒 を 含 む。(角閃石 を多く含む 牛胸西麓)	良好	
66 10	S D 230	弥生土器 甕 口縁部	口径 17.0	体部は瓶長の器形になるとと思われる。口縁部は「く」の字に屈曲し外反する。端部は瓶面を形成する。口縁部の内面はヨコナデを施す。外側は左上がりのタタキを施す。端面には墨文を施す。体部の内面はハケナデを施す。外側は左上がりのタタキを施す。口縁部の外側には部分的に煤が付着している。	7.5YR5/6 明褐色	1 ~ 3 mm の 砂 粒 を 含 む。(角閃石 を多く含む 牛胸西麓)	良好	

表15 出土遺物観察表(6)

遺物 番号 四版 書号	遺構	器種	法量 (cm)	形態・調整等	色調	胎土	焼成	備考
67 10	S D 230	弥生土器 甕 口縁部	口径 29.2	口縁部はゆるやかに曲がり外反し、底を有する。縁部はつまみ土上げ面を形成する。口縁部の内外面はヨコナゲを施す。体部の内面は輻方向の粗いハケナゲを施す。体部の外面は右上がりのタキを施す。口縁部の内面には部分的に黒斑がある。	7.5YR5/6 明褐色	1 ~ 3 mm の 砂粒を含む。 (角閃石 を多く含む 生病西蓋窓)	良好	
68 10	S D 230	弥生土器 甕 口縁部	口径 16.0 体部最大 径 18.7	体部は直筒の器形である。口縁部は「く」の字に筋曲し外反す。口縁部は上方につまみ土面を形成する。口縁部の内外面はヨコナゲを施す。体部の内面はユビナゲ、外面は右上がりのタキを施す。体部の下へ川位の外面には蓮が付着している。	7.5YR5/8 明褐色	1 ~ 2 mm の 砂粒を含む。 (角閃石 を多く含む 生病西蓋窓)	良好	
69 10	S D 230	弥生土器 甕 充形	口径 14.2 高さ 30.85 底径 5.9 体部最大 底 径 12.8	底部は突出する平底である。体部は継続の器形である。口縁部は「く」の字に筋曲し外反す。縁部は上に拡張し面を形成する。体部の内面はヘラケナゲを、外面は土壁が左上がり、下位は右上がりに施す。口縁部の外側および体部の外側には粘土結合の痕跡がある。	7.5YR4/6 暗褐色	1 ~ 3 mm の 砂粒を含む。 (角閃石 を多く含む 生病西蓋窓)	東 四 国 (阿波 V - 3 横 式) から の 開 人 か?	
70 10	S D 230	弥生土器 鉢 山縁部	口径 25.0	体部は内済し、口縁部は筋曲し外反する。縁部はつまみ土面を形成する。口縁部の内面および体部の内面はヘラミガキを左 上がりに施す。口縁部の外側と体部上位の内面はヘラミガキを右上がりに施す。口縁部の外側および体部の外側には粘土結合の痕跡がある。	7.5YR4/6 暗褐色	1 ~ 3 mm の 砂粒を含む。 (角閃石 を多く含む 生病西蓋窓)	良好	
71 10	S D 230	弥生土器 鉢 底部	底径 4.2	底部は突出する上げ底である。体部は直筒形に上外方に伸びる器形である。口縁部は筋曲し外反すると思われる。口縁部の内面はヨコナゲを施す。体部および底部の内外面はユビナゲを施す。底部の外側には部分的に黒斑がある。	7.5YR5/6 明褐色	1 ~ 3 mm の 砂粒を含む。 (角閃石 を多く含む 生病西蓋窓)	良好	
72 10	S D 230	弥生土器 右孔鉢 底部	底径 3.8	底部は平底である。体部はややふくらみをも上外方に伸びる器形である。口縁部は筋曲している。底~体部の内面はユビナゲを施し、ヘラ状工具による圧抜がある。底~体部の外側は右上がりのタキや後ハケナゲを施し、最終的にはユビナゲによくタキとハケナゲは消されている。底部には孔があけられている。	7.5YR6/6 暗褐色	1 ~ 4 mm の 砂粒を含む。 (角閃石 を多く含む 生病西蓋窓)	良好	
73 10	S D 230	弥生土器 右孔鉢 底部	口径 11.8 高さ 9.0 底径 3.4	底部は突出する平底である。体部は直筒形に上外方に伸びる器形である。口縁部は欠けみに近く終わる。底~体部の内面にはユビナゲを施す。内面にはヘラ状工具による圧抜がある。底部には孔があけられている。体部の内外面には部分的に黒斑がある。	7.5YR6/8 明褐色	1 ~ 3 mm の 砂粒を含む。 (角閃石 を多く含む 生病西蓋窓)	良好	
74 10	S D 230	弥生土器 高杯 杯部	口径 23	口縁部は深い杯底部から筋曲し外反する。縁部は丸く終わる。口縁部の内面は輻方向にヘラミガキを施すと思われるが内部は解説しており不明瞭である。外底は凹底形で3条施す。杯部の内面は左上がりのヘラミガキを施す。外縁は斜状状にヘラミガキを施す。口縁部~底部の内面には部分的に黒斑がある。	7.5YR6/6 明褐色	1 ~ 3 mm の 砂粒を含む。 (角閃石 を多く含む 生病西蓋窓)	良好	
75 10	S D 230	弥生土器 高杯 杯部	口径 24.6	口縁部は深い杯底部から筋曲し外反する。縁部は面を形成する。口縁部の外側はヘラミガキを左上がりに施す。杯部の内外面は斜状状にヘラミガキを施す。杯~口縁部の内面には部分的に黒斑がある。	7.5YR4/6 暗褐色	1 ~ 3 mm の 砂粒を含む。 (角閃石 を多く含む 生病西蓋窓)	良好	
76 10	S D 230	弥生土器 高杯 杯~脚部	口径 24.7 24.05	口縁部は深い杯底部から筋曲し外反する。縁部は面を形成する。短い脚部が付き、裾部は「ハ」の字に開く。口縁部の内面はヘラミガキを横方向に施すが、外縁はヘラミガキを左上がりに施される。脚部の内面は斜状状にヘラミガキを施す。脚部の内面にはしごり目がある。外縁は輻方向のミガキを施す。脚部~脚部に3方向のスカラ乳があけられている。杯~口縁部の内面には部分的に赤色無釉を含むしている。	7.5YR5/8 明褐色	1 ~ 2 mm の 砂粒を含む。 (角閃石 を多く含む 生病西蓋窓)	良好	
77 11	S D 230	弥生土器 高杯 杯~脚部	口径 24.05	口縁部は深い杯底部から筋曲し外反する。縁部は丸く終わる。底に対する脚部が付く。脚部は欠損しているが、「ハ」の字に開くと思われる。口縁部と杯部の内面はヘラミガキを施すと思われるが、底部削耗のため不明瞭である。口縁部の外側は輻方向のハケナゲを施す。杯部の外側はヘカナゲのちヘラミガキを左上がりに施す。脚部の内面にはしごり目がある。脚部は輻方向のミガキを施す。脚~脚部に3方向のスカラ乳があけられている。	7.5YR4/6 暗褐色	1 ~ 3 mm の 砂粒を含む。 (角閃石 を多く含む 生病西蓋窓)	良好	
78 11	S D 230	弥生土器 高杯 杯~脚部	口径 17.1	口縁部は深い杯底部から筋曲し外反する。縁部は丸く終わる。口縁部の内外面はヘラミガキを施すと思われるが、底部削耗のため不明瞭である。脚部の内面はしごり目あり。外縁は輻方向のミガキを施す。	10YR4/6 暗褐色	1 ~ 3 mm の 砂粒を含む。 (角閃石 を多く含む 生病西蓋窓)	良好	

表16 出土遺物觀察表(7)

遺物 番号 図版 番号	遺構	器種	法量 (cm)	形態・調整等	色調	地土	焼成	備考
79	S D 230	弥生上器 高杯 脚・裾部	昭徳 12.0	中空の脚部が付き、裾部は「ハ」の字に開く。杯部の外壁はヘラミガキを施すと思われるが、表側脚部のため不明瞭である。脚部の内面はしごり目である。	10YR6/6 明黄褐色	1 ~ 3 mm の良好 砂粒 を 含む。 (角閃石 を多く含む 生駒西麓層)		
80	S D 230	弥生土器 高杯 脚・裾部	昭徳 15.4	やや細い脚部が付き、側部は「ハ」の字に開く。裾部は面を形成する。杯部の内面はユビナデを施す。外壁は放射状にヘラミガキを施す。脚部の内面にはしごり目がある。外壁は羅方窓のミガキを施す。脚・裾部には3方向のスカシ孔があけられている。	7.5YR5/8 明褐色	1 ~ 3 mm の良好 砂粒 を 含む。 (角閃石 を多く含む 生駒西麓層)		
81	S D 230	弥生上器 高杯 脚部	昭徳 13.5	脚部は「ハ」の字に開く。端部は面を形成する。裾部の内面はユビナデ。外壁は細かいハケナデを施す。脚部には回線文を有する。	10YR4/6 棕褐色	1 ~ 3 mm の良好 砂粒 を 含む。 (角閃石 を多く含む 生駒西麓層)		
82	S D 230	弥生上器 高杯 脚部	昭徳 11.9	脚部は「ハ」の字に開く。端部は面を形成する。裾部の内外壁にはハケナデを施す。内面には粘土接合痕がある。端部には回線文を有する。	10YR4/6 棕褐色	1 ~ 3 mm の良好 砂粒 を 含む。 (角閃石 を多く含む 生駒西麓層)		
83	S D 230	弥生土器 器台 受部	口径 27.0	受部は直線的に上方方に伸びる。端部は下方に抵抗し面を形成する。受部の内外面は放射状のヘラミガキを施す。端面には波状文を施す。	7.5YR6/6 棕褐色	1 ~ 2 mm の良好 砂粒 を 含む。 (角閃石 を多く含む 生駒西麓層)		
84	S D 230	弥生土器 器台 脚・裾部	昭徳 15.0	「ハ」の字に広がる裾部。端部は面を形成する。脚部は直線的に上方方に伸びる。受部の内面はヨコナデを、脚部の内面はヨコナデを施す。脚部の外壁はヘラミガキを施す。脚部の内面はヨコナデを施す。ヘラミガキによる波がある。脚部の外壁は上がり型のハケナデを施す。脚部と脚部の縫と脚部の中位には3方式のスカシ孔があげられている。	7.5YR5/4 に ついで 10YR6/6 棕褐色	1 ~ 3 mm の良好 砂粒 を 含む。 (角閃石 を多く含む 生駒西麓層)		
85	S D 230	弥生土器 器台 脚・裾部	昭徳 15.6	「ハ」の字に広がる裾部。端部は上方につまみ出し面を形成する。脚部は直線的に上方方に伸びる。受部の内面はヨコナデを、脚部の内面はヨコナデを施す。脚部の外壁はヘラミガキを施す。裾部と脚部の縫と脚部の中位には3方式のスカシ孔があげられている。	7.5YR6/6 明褐色	1 ~ 3 mm の良好 砂粒 を 含む。 (角閃石 を多く含む 生駒西麓層)		
86	S D 230	弥生土器 器台 脚部		筒状の脚部である。脚部はゆるやかに「ハ」の字に広がる。受部および脚部の内面はヨコナデを、外壁は縱方向のミガキを施す。脚部にはスカシ孔が3箇所あげられている。	10YR4/4 棕褐色	1 ~ 3 mm の良好 砂粒 を 含む。 (角閃石 を多く含む 生駒西麓層)		
87	S D 230	弥生土器 手筋形土器 器 底～体部	口径 19.85 底径 22.2	底部は欠損している。体部は横長の球形で、下位と口部部に要する。1条帯。器部はややえみを伴つが、直線的に上内方に伸びる。口部部は器部の端にあり、器部は上方につまみ出しつる。器部の内面は板ナゲ、外壁はヘラミガキを施す。器部の内面はユビナデを施す。斜土台付の残渣がある。器部の外壁はヘラミガキを施す。	7.5YR4/6 棕褐色	1 ~ 2 mm の良好 砂粒 を 含む。 (角閃石 を多く含む 生駒西麓層)		
88	S D 230	弥生土器 ミニチャ アド器 底～底部	底径 3.6	底部はJ字底である。体部は球形である。口部部は欠損している。器部の内面はユビナデを施す。	7.5YR5/6 明褐色	1 ~ 3 mm の良好 砂粒 を 含む。 (角閃石 を多く含む 生駒西麓層)		
89	S D 230	弥生上器 ミニチャ アド器 底～底部	口径 7.5 底径 6.9 3.4 6.9	底部は突出する上り底である。体部は直線的に上方方に伸びる。器部は直線的に上方方に伸びる。口部部は外反し、器部は立ちぎみに近く終わる。器部の内面はユビナデを施す。体部の内外壁には部分的に風痕がある。	7.5YR6/6 明褐色	1 ~ 3 mm の良好 砂粒 を 含む。 (角閃石 を多く含む 生駒西麓層)		
S 1	S D 230	底石	大 16.0 粒 18.5 厚 7.1	形状は不定形である。使用したと思われる平らな面が4面認められた。				

表17 3区第3面小穴一覧表

遺構番号	地区	平面形状	長径(m)	短径(m)	径(m)	断面形状	深さ(m)	埋土	出土遺物
S P313	4C	円形	—	—	0.5	皿状形	0.06	10YR5/1 鷺灰色粗粒シルト混粘土	なし
S P314	4C	円形	—	—	0.8	皿状形	0.14	10YR5/1 鷺灰色粗粒シルト混粘土	なし

表18 3区第3面溝一覧表

遺構番号	地区	平面形状	幅(m)	断面形状	深さ(m)	埋土	出土遺物
S D302	4C・D	東西方向にやや蛇行し伸びる。	0.7	逆台形	0.17	10YR2/1 黒色細粒砂混粘土	なし
S D303	3・4C・D	東西方向に直線に伸びる。	2.3	逆台形	0.35	10YR5/1 鷺灰色粗粒砂～細粒砂混粘土 ラミナ構造 2.5Y5/1 黄灰色細粒砂混粘土	なし

第4面

弥生時代後期前葉以前の河川1条(N R401)を検出した。

N R401

3・4C・D区で検出した。平面形状は南北-北西方向に直線に伸び、幅は4.0mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.4mを測る。埋土は10YR7/1灰白色粗～細粒砂で、遺物の出土はなかった。

遺構に伴わない出土遺物

3層からは弥生土器、須恵器、瓦質土器、磁器などの破片が出土したが、図化できるものはなかった。

4区

第1面

平安～鎌倉時代の溝9条(S D101・102・134～140)を検出した。

S D101・102・134～140

S D101・102・134～140は調査区の全域で検出した。S D101・102・134・135・137～139は東西方向に、S D136・140は南北方向に伸びる。これらの溝は耕作に伴うものと考えられる。S D101・102・134～136・140からは土師器、須恵器、瓦質土器の破片が出土した。このうち図化したものは、S D134の90、S D140の91である。

90・91は平安～鎌倉時代に比定できる土師器の小皿である。なお、S D101・102の詳細は表1、他の各溝の詳細は表19、出土遺物の詳細は表22にまとめた。

第2面

弥生時代後期中葉の土坑2基(S K202・203)、小穴5個(S P201～205)、溝4条(S D234～237)および平安時代の溝4条(S D202・231～233)を検出した。

S K202・203

S K203は4区と5区で検出した。S K202・203からは弥生土器が出土した。このうち図化したものは、S K202からの弥生時代後期(河内V-3様式)に比定できる92～95である。

92はの長頸壺で、頸部の外面にはヘラ記号を施す。93は小型の壺。94は壺の底部と思われる。

底部は「ハ」の字に開く上げ底である。95は壺で、口縁部は受口状を呈す。体部外面の下位、中位、上位にはそれぞれ角度の違う右上がりのタタキを施しており、分割成形を行ったことがわかる。なお、各土坑の詳細は表20、出土遺物の詳細は表22にまとめた。

SP201~205

SP201~205は北部で検出した。SP203・204からは弥生土器が出土したが、図化できるものはなかった。なお、各小穴の詳細は表21にまとめた。

SD202・231~237

SD202・231~233は南部で、SD234~237は北部で検出した。SD235からは弥生土器が出土した。このうち図化したものは、SD235の弥生時代後期(河内V-3~VI-1様式)に比定できる96~99である。96は壺の口縁部で、端面には回線文を施したのち、円形竹管を押した円形浮文が等間隔に貼り付ける。河内V-3に比定できる。97・98は壺。97は体部と頸部の境のくびれが不明瞭なもので、河内VI-1様式に比定できる。99は鉢で、外反する口縁をもつ。なお、SD202の詳細は表2、SD231~237の詳細は表23、出土遺物の詳細は表22にまとめた。

第3面

弥生時代後期前葉の河川1条(NR301)および古墳時代後期の溝1条(SD304)を検出した。

表19 4区第1面溝一覧表

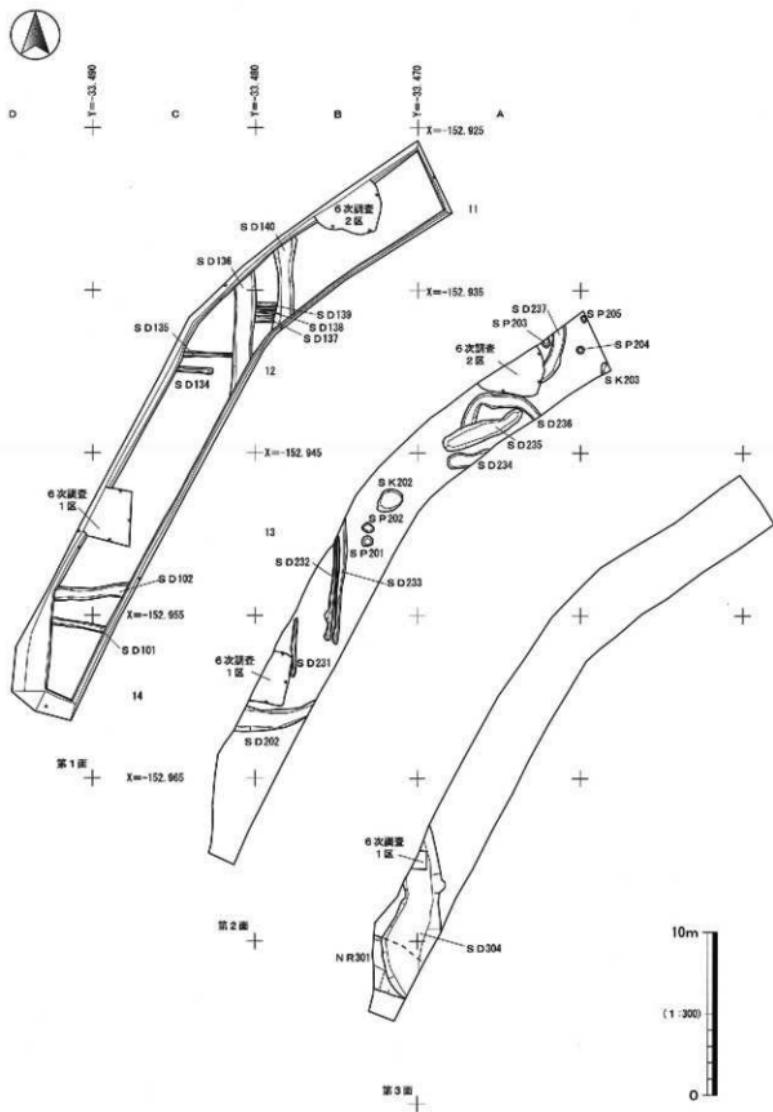
遺構番号	地区	平面形状	幅(m)	断面形状	深さ(m)	埋土	出土遺物
SD134	12C	東西方向に直線に伸びる。	0.2	皿状形	0.5	N4/0	灰色細粒～粗粒砂 土師器、須恵器
SD135	12C	東西方向に直線に伸びる。S.D136に切られる。	0.35	皿状形	0.5	N4/0	灰色細粒～粗粒砂 土師器、瓦質土器
SD136	II・IIB・C	南北方向に直線に伸びる。S.D135・137~139を切る。	1.3	逆台形	0.1	N4/0	灰色細粒～粗粒砂 土師器、須恵器
SD137	12B	東西方向に直線に伸びる。S.D136・140に切られる。	0.4	逆台形	0.1	N4/0	灰色細粒～粗粒砂 なし
SD138	12B	東西方向に直線に伸びる。S.D136・140に切られる。	0.25	逆台形	0.1	N4/0	灰色細粒～粗粒砂 なし
SD139	12B	東西方向に直線に伸びる。S.D136・140に切られる。	0.3	逆台形	0.1	N4/0	灰色細粒～粗粒砂 なし
SD140	II・IIB	南北方向に直線に伸びる。S.D137~139を切る。	0.8	皿状形	0.1	N4/0	灰色細粒砂混粗粒砂 土師器、須恵器

表20 4区第2面土坑一覧表

遺構番号	地区	平面形状	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	断面形状	埋土	出土遺物
SK202	12C	円形	-	-	1.4	逆台形	0.3	10TR2/1 黒色細粒 砂泥粘土 赤生土器
SK203	IIA	半円形	-	-	0.6	逆台形	0.1	10TR2/1 黒色細粒 砂泥粘土 赤生土器

表21 4区第2面小穴一覧表

遺構番号	地区	平面形状	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	断面形状	埋土	出土遺物
SP201	12C	円形	-	-	0.6	逆台形	0.2	N2/0 黒色細粒砂 泥粘土 なし
SP202	12C	円形	-	-	0.7	皿状形	0.07	N2/0 黒色細粒砂 泥粘土 なし
SP203	IIIB	円形	-	-	0.45	逆台形	0.1	N2/0 黒色細粒砂 泥粘土 須恵器
SP204	IIA・B	円形	-	-	0.5	逆台形	0.2	N2/0 黒色細粒砂 泥粘土 須恵器
SP205	IIA	円形	-	-	0.3	逆台形	0.08	N2/0 黒色細粒砂 泥粘土 なし



第14図 4区第1～3面平面図

表22 出土遺物観察表(8)

遺物番号 図版番号	遺構	器種	量(㌘)	形態・調整等	色調	胎土	焼成	備考
90 SD 134	土師器 小皿 口縁部	口径 9.0	10YR8/1 灰白色	1 mm程度の良好 砂粒を含む。				
91 SD 140	土師器 皿 口縁部	口径 14.0	10YR8/2 灰白色	1 mm程度の良好 砂粒を含む。				
92 SK 202	弥生土器 蓋 口縁部	口径 15.0	7.5YR5/8 明褐色	1 ~ 4 mmの良好 砂粒を含む。 (角閃石 を多く含む 生駒西麓)				
93 SK 202	弥生土器 蓋 口縁部	口径 10.0	7.5YR5/8 明褐色	1 ~ 2 mmの良好 砂粒を含む。 (角閃石 を多く含む 生駒西麓)				
94 SK 202	弥生土器 蓋 底部	底径 6.5	7.5YR4/4 棕褐色	1 ~ 3 mmの良好 砂粒を含む。 (角閃石 を多く含む 生駒西麓)				
95 SK 202	弥生土器 裏 光形	口径 14.0 底径 21.0	7.5YR4/4 にぶい 底面 4.8	7.5YR4/4 にぶい 底面 4.8形成する。底部の内外面はユビナデを施す。体部の内面にはハケ 底部最大ナデを施し、粘土結合の痕跡がある。外面部は右上がりのタカキ 径 16.7	1 ~ 3 mmの良好 砂粒を含む。 (角閃石 を多く含む 生駒西麓)			
96 SD 235	弥生土器 蓋 口縁部	口径 18.0 底径 21.0	7.5YR5/6 明褐色	1 ~ 5 mmの良好 砂粒を含む。 (角閃石 を多く含む 生駒西麓)				
97 SD 235	弥生土器 蓋 口縁部	口径 11.0 底径 11.0	7.5YR5/6 明褐色	1 ~ 3 mmの良好 砂粒を含む。 (角閃石 を多く含む 生駒西麓)				
98 SD 235	弥生土器 蓋 底部	底径 4.8	7.5YR5/6 明褐色	1 ~ 2 mmの良好 砂粒を含む。 (角閃石 を多く含む 生駒西麓)				
99 SD 235	弥生土器 蓋 口縁部	口径 13.0 底径 13.0	7.5YR4/4 棕褐色	1 ~ 3 mmの良好 砂粒を含む。 (角閃石 を多く含む 生駒西麓)				

表23 4区第2面溝一覧表

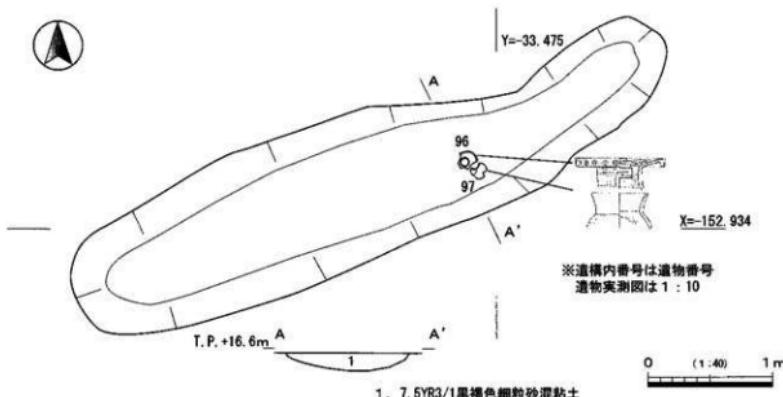
遺構番号	地区	平面形状	幅(m)	断面形状	深さ(m)	埋土	出土遺物
S D 231 13C	南北方向に直線に伸びる。	0.3	皿状形	0.05	5Y4/1 灰色粗粒砂		なし
S D 232 12・13C	南北方向に直線に伸びる。	0.2	皿状形	0.05	5Y4/1 灰色粗粒砂		土師器、須恵器
S D 233 12・13C	南北方向に直線に伸びる。	0.25	皿状形	0.1	5Y4/1 灰色粗粒砂		なし
S D 234 11・12B	東西方向に直線に伸びる。	0.9	皿状形	0.07	7.5YR3/1 黑褐色粗粒砂混粘土	弥生土器	
S D 235 11B	東西方向に伸びる。	1.0	皿状形	0.13	7.5YR3/1 黑褐色粗粒砂混粘土	弥生土器	
S D 236 11B	北東～南西方向に弧状に伸びる。	0.8	皿状形	0.09	7.5YR3/1 黑褐色粗粒砂混粘土	弥生土器	
S D 237 11B	南北方向に弧状に伸びる。	0.7	逆台形	0.15	7.5YR3/1 黑褐色粗粒砂混粘土	弥生土器	

SD 304

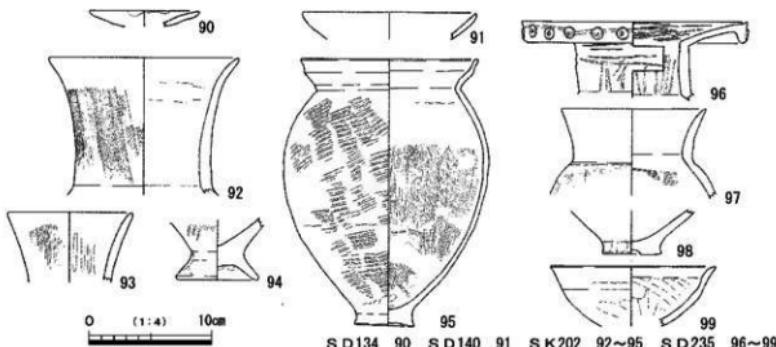
13・14C・D地区で検出した。平面形状は南北方向に直線に伸びており、幅は2.3mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.16mを測る。埋土はN2/0黒色細礫混粘土で、溝内からは弥生土器の破片が出土したが、図化できるものはなかった。なお、第6次の1区の落込み11(本書掲載I)は、SD 304の東肩に当たり同一の遺構である。落込み11からは須恵器が出土しており、同遺構は2面に帰属すると考える。

NR 301

13D・14C・D地区で検出した。南東～北西方向に伸び、幅0.3mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.5mを測る。埋土は7.5YR6/1褐色細中礫混粗粒砂で、遺物の出土はなかった。なお、この遺構は1区でも検出している。



第15図 4区 SD 235 平・断面図



第16図 4区 SD 134・140、SK 202、SD 235 出土遺物実測図

5区

第1面

平安～鎌倉時代の溝15条(S D141～155)を検出した。

S D141～155

S D141～146は南部で、S D147～155は北部で検出した。S D141・142・144・145・147・148・150・152～154からは土師器、須恵器、瓦質土器の破片が出土した。このうち図化したものはS D142の100、S D144の101、S D147の102である。

100は鎌倉時代初頭頃の土師器小皿である。101は鎌倉～室町時代の瓦器碗である。102は平安～鎌倉時代の瓦器碗である。なお、各溝の詳細は表24、出土遺物の詳細は表26にまとめた。

第2面

弥生時代後期中葉の土坑1基(S K204)、溝2条(S D238・239)を検出した。

S K204

9A地区で検出した。検出した平面形状は半円形で、幅1.6mを測る。断面状は逆台形で、深さ0.2mを測る。埋土は10YR2/1黒色細粒砂混粘土で、弥生土器、土師器の破片が出土したが、図化できるものはなかった。

表24 5区第1面溝一覧表

遺構番号	地区	平面形状	幅(m)	断面形状	深さ(m)	埋土	出土遺物
S D141	8～11A	南北方向に直線に伸びる。S D143・144を切る。	1.7	逆台形	0.2	14/0 黒色細粒砂混粘土	土師器、須恵器
S D142	11A	南北方向に直線に伸びる。S D143を切る。	0.6	逆台形	0.25	14/0 黑色細粒砂混粘土	土師器、須恵器
S D143	11A	東西方向に直線に伸びる。S D142・144に切られる。	0.3	逆台形	0.05	14/0 黑色細粒砂混粘土	なし
S D144	9～11A	南北方向に直線に伸びる。S D143・145・146を切る。	0.7	逆台形	0.1	14/0 黑色細粒砂混粘土	弥生後期、土師器、須恵器、瓦器
S D145	10A	東西方向に直線に伸びる。S D141・144に切られる。	0.25	逆台形	0.06	14/0 黑色細粒砂混粘土	土師器
S D146	9・10A	東西方向に直線に伸びる。S D141と144に切られる。	0.35	逆台形	0.05	14/0 黑色細粒砂混粘土	なし
S D147	6・7A	南北方向に直線に伸びる。S D148～152・154を切る。	1.2	逆台形	0.1	14/0 黑色細粒砂混粘土	弥生後期、瓦器
S D148	7A	南西～北東方向に直線に伸びる。S D147に切られる。	0.25	直状形	0.1	10YR4/1 暗灰色細粒砂混粘土	土師器、須恵器
S D149	7A	南西～北東方向に直線に伸びる。S D147に切られる。	0.25	直状形	0.1	10YR4/1 暗灰色細粒砂混粘土	なし
S D150	7A	南西～北東方向に直線に伸びる。S D147に切られる。	1.0	直状形	0.06	10YR4/1 暗灰色細粒砂混粘土	土師器
S D151	7A	南西～北東方向に直線に伸びる。S D147に切られる。	0.25	直状形	0.06	10YR4/1 暗灰色細粒砂混粘土	なし
S D152	6・7A	南西～北東方向に直線に伸びる。S D153を切る。S D147に切られる。	0.75	直状形	0.75	10YR4/1 暗灰色細粒砂混粘土	土師器
S D153	6A	南東～北西方向に直線に伸びる。S D152に切られる。	0.4	直状形	0.05	14/0 黑色細粒砂混粘土	弥生後期
S D154	6A・B	南北方向に直線に伸びる。S D147に切られる。	0.3	直状形	0.06	10YR4/1 暗灰色細粒砂混粘土	土師器
S D155	6A・B	南北方向に直線に伸びる。	1.5	逆台形	0.25	14/0 黑色細粒砂混粘土	なし

表25 5区第2面溝一覧表

遺構番号	地区	平面形状	幅(m)	断面形状	深さ(m)	埋土	出土遺物
S D238	10A	南西～北東方向に直線に伸びる。	1.1	直状形	0.1	5YR3/1 黑褐色細粒砂混粘土	土師器
S D239	7・8A	東西方向に直線に伸びる。	2.1	直状形	0.15	7.5YR2/2 黑褐色細粒砂混粘土	弥生土器

S D 238・239

S D 238は南部で、S D 239は北部で検出した。S D 238・239からは、弥生土器、土師器の破片が出土した。このうち図化したものはS D 239の弥生時代後期に比定できる103～107である。103は壺の体部で、外面に円形竹管文を施す。104は甕で、外面の下位と中位には角度が異なるタタキを施す。105は鉢で、底部は上げ底である。106は底部有孔鉢である。107は高杯の脚～裾部である。なお、各溝の詳細は表25に、出土遺物の詳細は表26にまとめた。

第3面

弥生時代後期前葉の河川3条(N R 302～304)を検出した。

N R 302～304

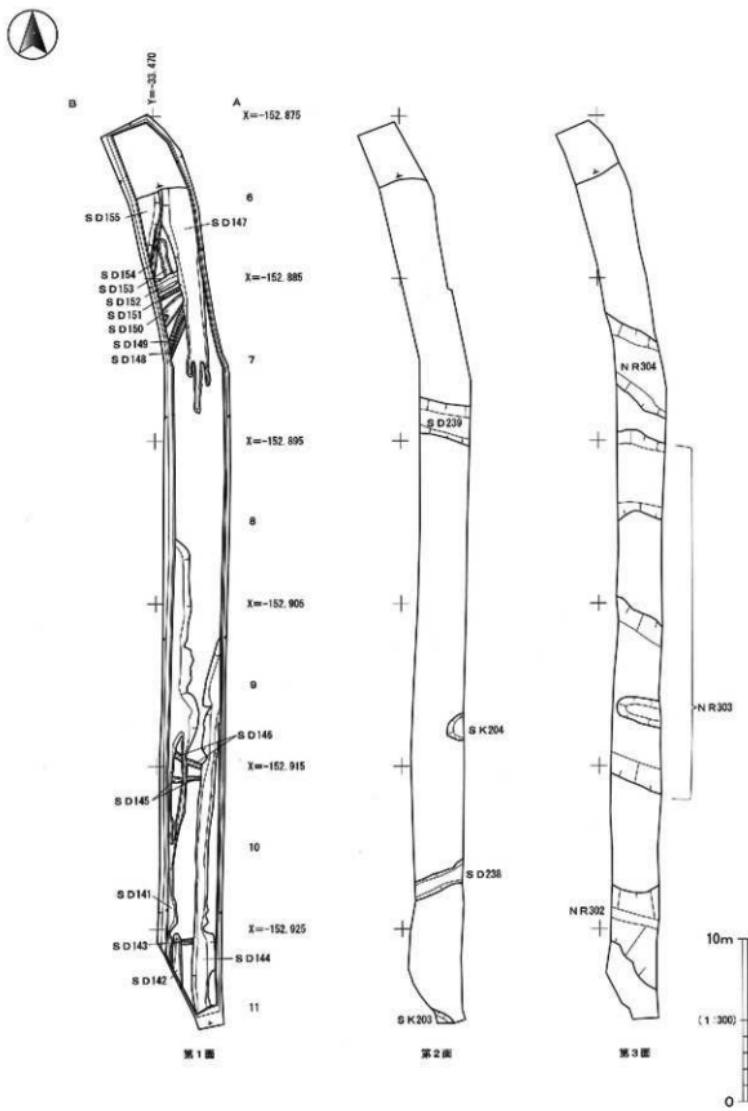
N R 302・303は南東から北西方向に流れる。N R 302・303は2区でも検出しており、詳細は表8に記載した。N R 304は7A地区で検出した。南東から北西方向に直線に伸びる。幅は3.5mを測る。断面状は逆台形で、深さ0.8mを測る。埋土は10YR6/1褐色灰色細～中礫混粗粒砂で、遺物の出土はなかった。

遺構に伴わない出土遺物

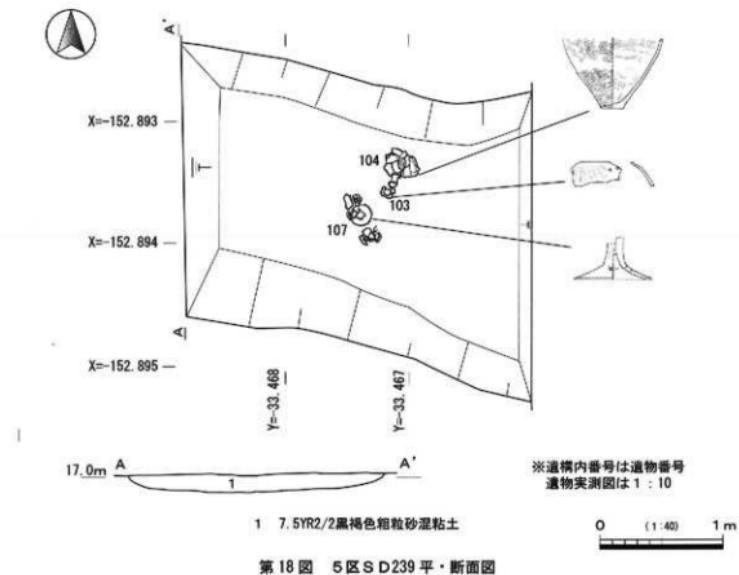
3層からは弥生土器、土師器、須恵器が、5層からは弥生土器、須恵器などの破片が出土した。このうち図化したものは5層出土の弥生時代後期中葉に比定できる108である。108は高杯で、口縁部は外反し、脚部は中空である。出土遺物の詳細は表26にまとめた。

表26 出土遺物観察表(9)

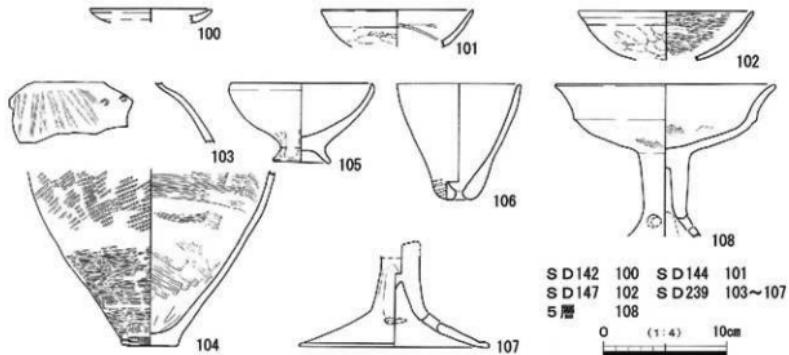
遺物 番号 回版 書号	遺構	基準	法量 (cm)	形態・調整等	色調	胎土	焼成	備考
100 S D 142	土師器 小壺 口縁部	口径 10.0	内側する口縁部。端部は尖りぎみに丸く終わる。口縁部の内外にはヨコナデを施す。	T.5VR7/3 にぶい 褐色	1 mm程度の良好 砂粒を含む。			
101 S D 144	瓦器 甕 口縁部	口径 12.4	内側する口縁部。端部は尖りぎみに丸く終わる。口縁部の内外にはヨコナデを施す。体部の内面はヘラミガキを粗雑に施す。外側にはビナゲを施す。粘土接合痕がある。	104/0 褐色	1～3 mmの良好 砂粒を含む。			
102 S D 147	瓦器 甕 口縁部	口径 14.2	内側する口縁部。端部は尖りぎみに丸く終わる。口縁部の内外にはヨコナデを施す。体部の内面は横方状のヘラミガキを粗雑に施す。外側にはビナゲを施す。	54/1 褐色	1～3 mmの良好 砂粒を含む。			
103 S D 12 239	弥生土器 壺 体部			体部の内面はナグで施す。口・肩・腰部の痕跡がある。外側は綱方向のヘラミガキのち円形竹管文を施す。	7.5YR6/8 明褐色	1～3 mmの良好 砂粒を含む。		
104 S D 12 239	弥生土器 壺 体～底部	底径 4.7		底部は突出する平底である。底部の体部になるとと思われる。体部の内面はハケナデを施し、内面の底部にはヘラ状工具による圧痕がある。外側はタタキを施す。体部中位には漆が付着している。	7.5YR3/2 黒褐色	1～4 mmの良好 砂粒を含む。(角閃石 を多く含む 牛乳西置場)		
105 S D 12 239	弥生土器 鉢 口縁～底部	口径 11.4 器高 6.5 底径 4.4		底部は上げ底である。口縁部内外する浅い皿状の器形である。口縁部の内外はヨコナデ。体部および底部内外面ビニダーペを施す。	7.5YR5/8 明褐色	1～4 mmの良好 砂粒を含む。(角閃石 を多く含む 牛乳西置場)		
106 S D 239	弥生土器 甕 底部有孔 鉢 口縁～底 部	口径 10.0		口縁部は直線的に上方方に伸びる。口縁部の内外面はヨコナデ。体部の内面はナグ。外側は右上がりのタタキを施す。底部には焼成前に孔があげられている。	10YR6/3 にぶい 褐色	1～4 mmの良好 砂粒を含む。(角閃石 を多く含む 牛乳西置場)		
107 S D 12 239	弥生土器 高杯 脚～裾部	底径 15.6		柱窓の脚部から裾部は「ハ」の字にひらくと思われる。脚部内面ビニダーペ。外縁継方向へのヘラミガキを施す。脚部内外面はハケナデとと思われるが、表面磨耗のため不明瞭である。裾部に4方向のスカシ孔があげられている。	7.5YR6/8 棕色	1～4 mmの良好 砂粒を含む。(角閃石 を多く含む 牛乳西置場)		
108 5層	弥生土器 高杯 杯～脚部	口径 17.5		柱窓の脚部から裾部は「ハ」の字にひらくと思われる。浅い杯部で、口縁部は外反す。脚部内面ビニダーペ。外縁継方向へのヘラミガキを施す。脚部内外面はハケナデのちヘラミガキと思われるが、表面磨耗のため不明瞭である。口縁部の内外面はヨコナデを施す。脚部と裾部の間に3方向のスカシ孔がある。	2.5YR4/8 赤褐色	1～3 mmの良好 砂粒を含む。(角閃石 を多く含む 牛乳西置場)		



第17図 5区第1~3面平面図



第18図 5区SD239平・断面図



第19図 5区 S D142・144・147、S D239、5層出土遺物実測図

6区

第1面

平安～鎌倉時代の溝10条(S D156～165)、近世の河川1条(N R101)を検出した。

S D156～165

S D156～164は南部で検出した。また、S D165は北端で検出した。S D158～165は東西方向に、S D156と157は南北方向に伸びる。このうちS D158は研究会第8次調査のS D101と、S D159は同S D102と同一の遺構である。S D156・157・159からは弥生土器、土師器の破片が出土したが、図化できるものはなかった。なお、各溝の詳細は表27にまとめた。

N R101

3・4 A・B地区で検出した。東西方向に直線に伸びる。幅は16.0mを測る。断面形状は逆台形で、深さ1.1mを測る。埋土はI 10Y5/1灰色細粒砂混粘土、II 5Y7/1灰白色細～中砂、III 10Y R 7/1灰白色細～粗粒シルト、IV 5Y5/1灰色細～中疊、V 5Y5/1灰色細～粗粒砂で、縄文土器、土師器、須恵器の破片が出土した。このうち図化したものは109である。

109は縄文時代中期～後期の深鉢か浅鉢と思われる。外面には縄文と爪形文を施す。なお、出土遺物の詳細は表30にまとめた。

第2面

弥生時代後期中葉の土坑1基(S K205)、溝2条(S D240・241)を検出した。

S K205

5 A・B地区で検出した。検出した平面形状は半円形で、径1.5mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.14mを測る。埋土は7.5YR2/1黒色細粒シルト混粘土で、出土遺物はなかった。

S D240・241

S D240・241は南部で検出した。S D240からは弥生時代後期の遺物が出土した。このうち図化したものはS D240の弥生時代後期中葉に比定できる110・111である。

110は壺、111は甕である。S D240は研究会第8次調査のS D302と同一の遺構である。なお、各溝の詳細は表28、出土遺物の詳細は表30にまとめた。

第3面

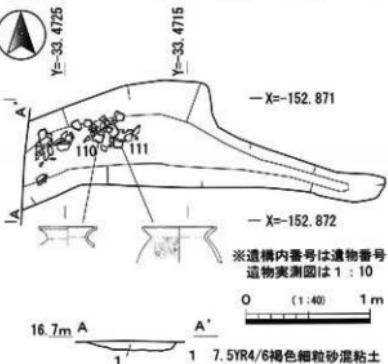
弥生時代後期前葉の溝2条(S D305・306)を検出した。

S D305・306

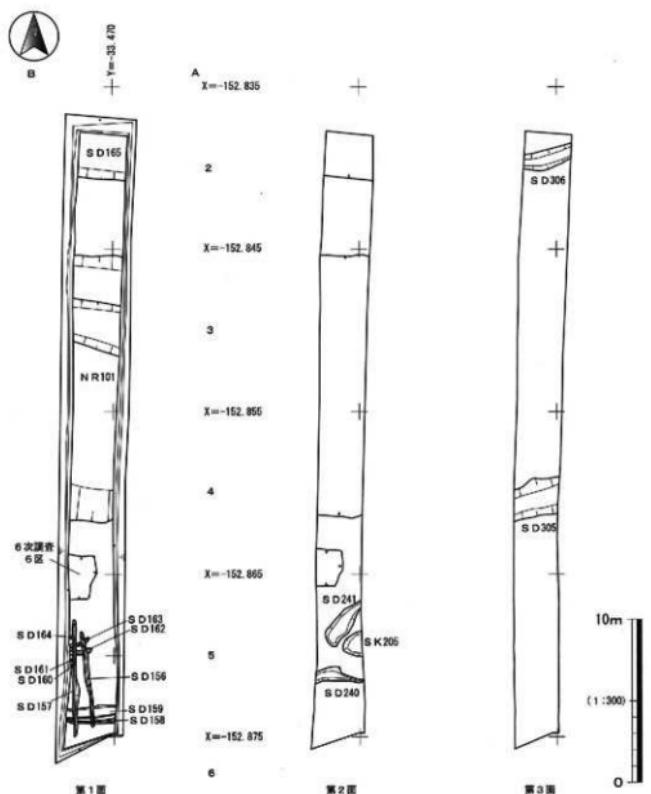
S D305は南部で、S D306は北端で検出した。各溝からの出土遺物はなかった。なお、各溝の詳細は表29にまとめた。

遺構に伴わない出土遺物

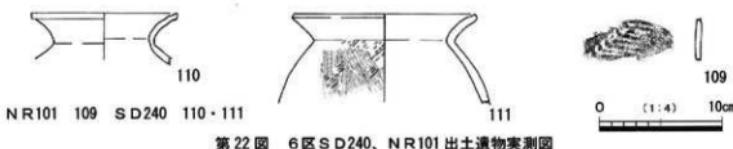
5層からは土師器、須恵器、黒色土器などの破片が出土したが、図化できるものはなかった。



第20図 6区 S D240平・断面図



第21図 6区第1～3面平面図



第22図 6区SD240、NR101出土遺物実測図

表27 6区第1面溝一覽表

遺構番号	地区	平面形状	幅(m)	断面形状	深さ(m)	埋土	出土遺物
S-D156	5A	南北方向に直線的に伸びる。S-D158・159・162・163を切る。	0.25	直状形	0.05	5Y7/3	浅黄色細粒砂混粘土 朱生土器、上部器
S-D157	5A	南北方向に直線的に伸びる。S-D158・159・164を切る。	0.4	直状形	0.05	5Y7/3	浅黄色細粒砂混粘土 上部器
S-D158	5A・B	東西方向に直線的に伸びる。S-D156・157に切られる。	0.2	直状形	0.05	5Y6/1	灰色細粒砂混粘土 なし
S-D159	5A・B	東西方向に直線的に伸びる。S-D156・157に切られる。	0.7	柱状形	0.07	5Y6/1	灰色細粒砂混粘土 上部器
S-D160	5A	東西方向に直線的に伸びる。S-D157に切られる。	0.2	直状形	0.03	5Y6/1	灰色細粒砂混粘土 なし
S-D161	5A	東西方向に直線的に伸びる。S-D157に切られる。	0.25	直状形	0.03	5Y6/1	灰色細粒砂混粘土 なし
S-D162	5A	東西方向に直線的に伸びる。S-D158・157に切られる。	0.3	直状形	0.05	5Y6/1	灰色細粒砂混粘土 なし
S-D163	5A	東西方向に直線的に伸びる。S-D156・157に切られる。	0.25	直状形	0.05	5Y6/1	灰色細粒砂混粘土 なし
S-D164	5A	東西方向に直線的に伸びる。S-D157に切られる。	0.2	直状形	0.05	5Y6/1	灰色細粒砂混粘土 なし
S-D165	2A・B	東西方向に直線的に伸びる。	3.0以上	逆台形	0.5以上	5Y6/1	灰色細粒砂混粘土 なし

表28 6区第2面溝一覽表

遺構番号	地区	平面形状	幅(m)	断面形状	深さ(m)	埋土	出土遺物
S-D240	5-A・B	東西方向に直線的に伸びる。	0.9	矩状凹	0.05	7.5YR4/6	褐色細粒沙泥粘土
S-D241	5-A・B	南北方向に直線的に伸びる。	1.1	凸台状	0.15	7.5YR4/6	褐色細粒沙泥粘土なし

表29 6区第3面溝一覧表

遺構番号	地区	平面形状	幅(m)	断面形状	深さ(m)	埋土	出土遺物
S-D306	4-A・B	東西方向に直角に伸びる。	2.0	逆台形	0.25	10YRS/6	黄褐色粗粒砂混雜 なし
S-D306	2-A・B	東西方向に直角に伸びる。	0.9	逆台形	0.18	10YRS/1	褐灰色粗粒砂 なし

表30 出土遺物觀察表(10)

遺物 番号	通構 図版 番号	種類	法量 (cm)	形態・調整等	色調	胎土	焼成	備考
109 12	N R 101	縄文土器 深鉢か浅 鉢 体部		体部の内面はナデ、外面は攣文と爪形文を施す。	7.5IK3/4 暗褐色	1~4 mmの 砂粒を含む。 (角閃石 を多く含む 牛背西面)	良好	
110	S D 240	弥生土器 壺 口縁部	口径	口縁部は外反する。壺部はつまみ上げ、直を形成する。口縁部の内外面はヨコナデ、体部の内外面はナデを施す。	2.5IK4/8 暗褐色	1~3 mmの 砂粒を含む。	良好	
111	S D 240	弥生土器 壺 口縁部	口径	口縁部は「く」の字に外反する。壺部はつまみ上げ、直を形成する。体部の内面はナデを施す。外面は右上がりのタタキのち櫻色 ハケナデを施す。体部の中位には灰が付着している。	10IK6/3 にぶい黄 櫻色	1~3 mmの 砂粒を含む。 (角閃石 を多く含む 牛背西面)	良好	

第2章　まとめ

第1面：調査地全域で検出した溝群(S D101~165)は、南北と東西方向に直線に伸びる形状で幅も狭く、深さも浅いことから、おそらく畑の畝溝であると思われ、今回の調査地は生産域であることが判明した。また、取水または排水の機能を持つと推測される河川NR101を6区の中央で検出した。

第2面：3区のS D230、4区のS D235、5区のS D239、6区のS D240からは弥生時代後期中葉に比定できる遺物が出土した。特にS D230からは、当時の日常生活に使用していたと思われる土器が折り重なるように多量に廃棄されていた。この面では、柱跡や井戸などの居住域を示す遺構の検出はなかったが、本調査地の近隣に同時期の居住域が存在していることが予想できる。また、4区の北東側のS D235周囲ではL字に曲がる溝や弧状に伸びる溝を検出しており、S D235からは、口縁部のみの壺が出土していることから、居住区以外の区域であった可能性が考えられる。

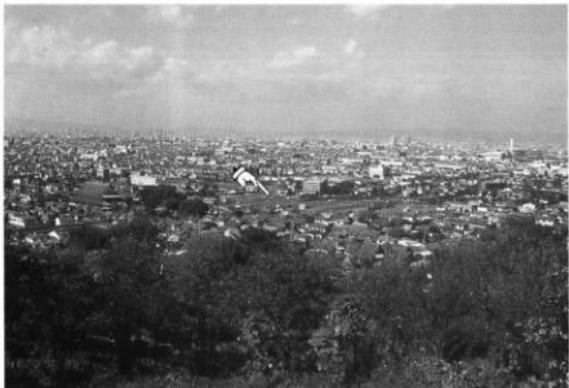
1区のS D301と4区のS D304は検出した場所が近接しており、同じ遺構であると考えられる。S D301からは、古墳時代後期の遺物が多く出土したが、この溝以外に同時代の遺構の検出および遺物の出土はなかった。本調査地の南西側約200m地点で研究会が平成2年度に行った郡川第2次調査では、古墳時代後期の遺物が出土した河川や同時期の遺物包含層を確認している(原田1999)。一方、北側約20m地点の平成15年度の調査(郡川遺跡2002-304)では、同時期の遺構、遺物の検出はなかった(岡田2004)。以上から、今回の調査地の南端で検出したS D301・304より南部に集落が広がっている可能性が高いと考えられる。

第3面：1区の北端と2区の南端で、弥生時代後期前葉に比定できる建物などの構築物に伴う柱穴跡を密集した状況で検出した。柱列は南東→北西へ直線に伸びており、柱穴列の方向は若干のずれがある。また、柱間は1.5mと1.7mに分かれるので、複数の構築物が建っていた可能性がある。

参考文献

- ・寺沢 薫・森岡秀人編著 1989『弥生上器の様式と編年 近畿編I』 木耳社
- ・菅原康夫・梅木謙一編著 2000『弥生上器の様式と編年 四国編』 木耳社
- ・原田昌則 1999『(財)八尾市文化財調査研究会報告64』『■ 郡川遺跡第2次調査(K R90-2)』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・岡田清一 2004「19 郡川遺跡(2002-304)の調査」『八尾市内遺跡平成15年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告49 八尾市教育委員会
- ・西村公助 2008『郡川遺跡 第8次調査』(財)八尾市文化財調査研究会報告123 (財)八尾市文化財調査研究会

図 版



図版 2



1区第1面(北から)



1区第2面(北から)



1区第3面(北から)



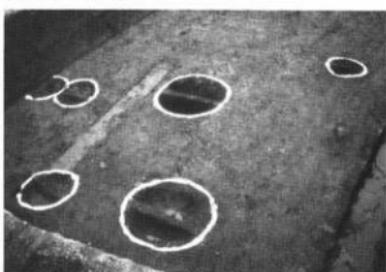
2区第1面(南から)



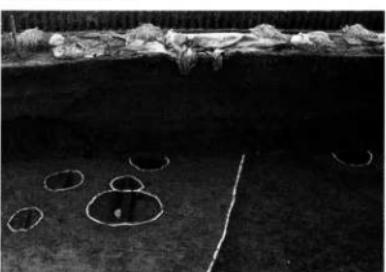
2区第2面(南から)



2区第3面(南から)



1区S P 301~306検出状況(北西から)



2区S P 307~312検出状況(東から)



3区第1面(南から)



3区第2面(南から)



3区第3面(南から)



3区SD230調査状況(北東から)



3区SD230(南西から)

図版
4



3区S D230遺物出土状況(南西から)



3区S D230遺物出土状況(南から)



3区S D230遺物出土状況(南から)



3区第4面(南から)



3区N R401(南東から)



4区第1面(北東から)



4区第2面(北東から)



4区第3面(北東から)



4区S D 235(南から)



4区S D 235遺物出土状況(南から)



5区第1面(北から)



5区第2面(北から)



5区第3面(北から)

図版
6



5区S D 239(西から)



5区S D 239遺物出土状況(西から)



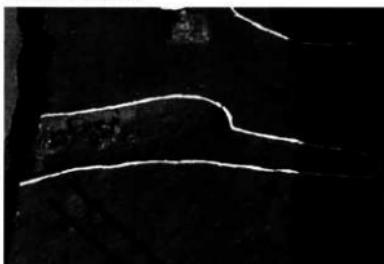
6区第1面(南から)



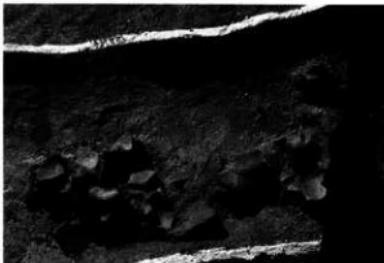
6区第2面(南から)



6区第3面(南から)



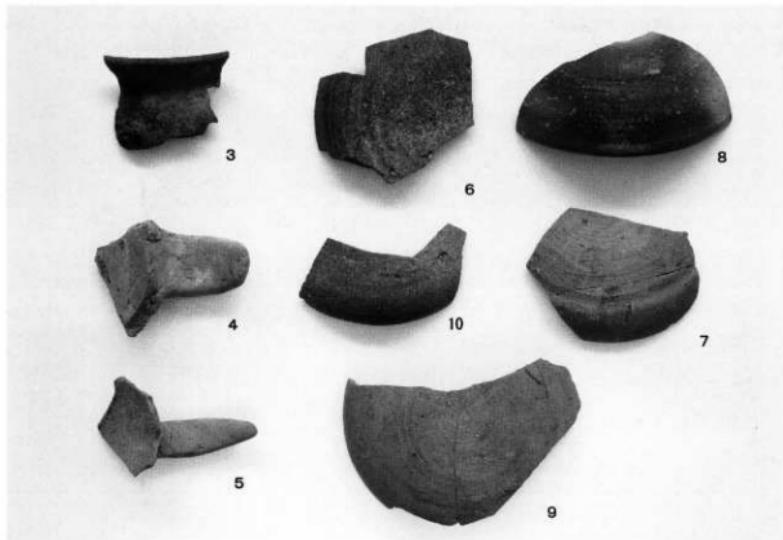
6区S D 240(南から)



6区S D 240遺物出土状況(北から)

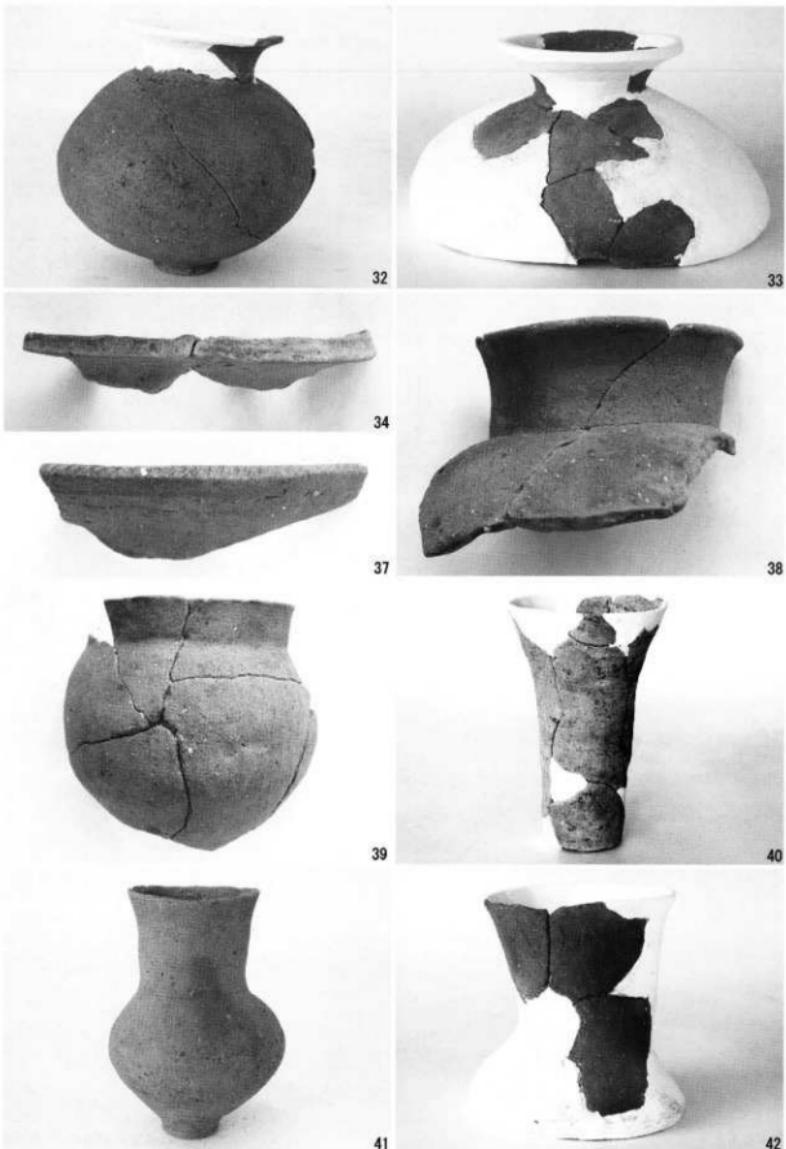


6区S D 240遺物出土状況(東から)

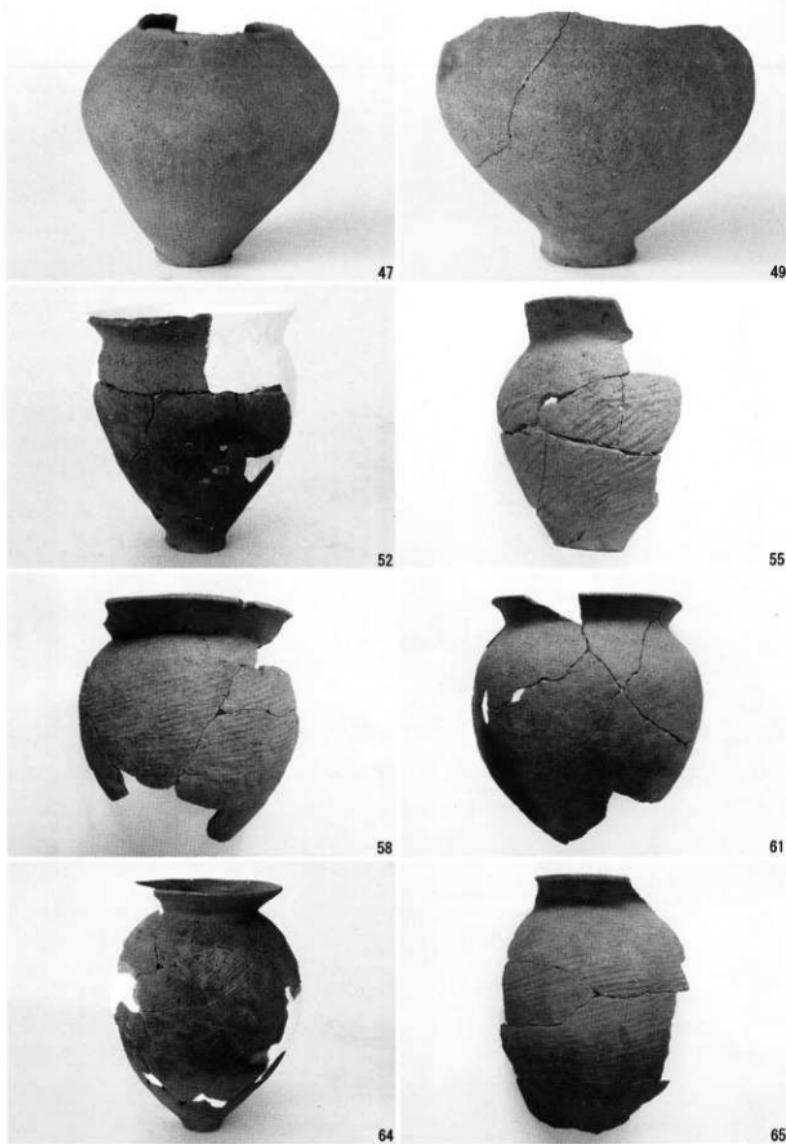


SD 301(3~19)出土遺物

図版
8

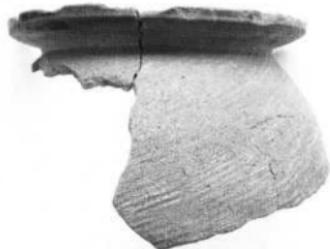


S D 230(32~34・37~42)出土遺物



S D 230(47・49・52・55・58・61・64・65) 出土遺物

図版 10



66



67



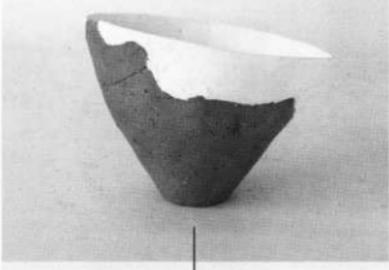
68



69



70

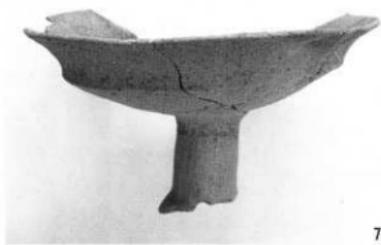


71



72

S D 230(66~72)出土遺物



77



78



83

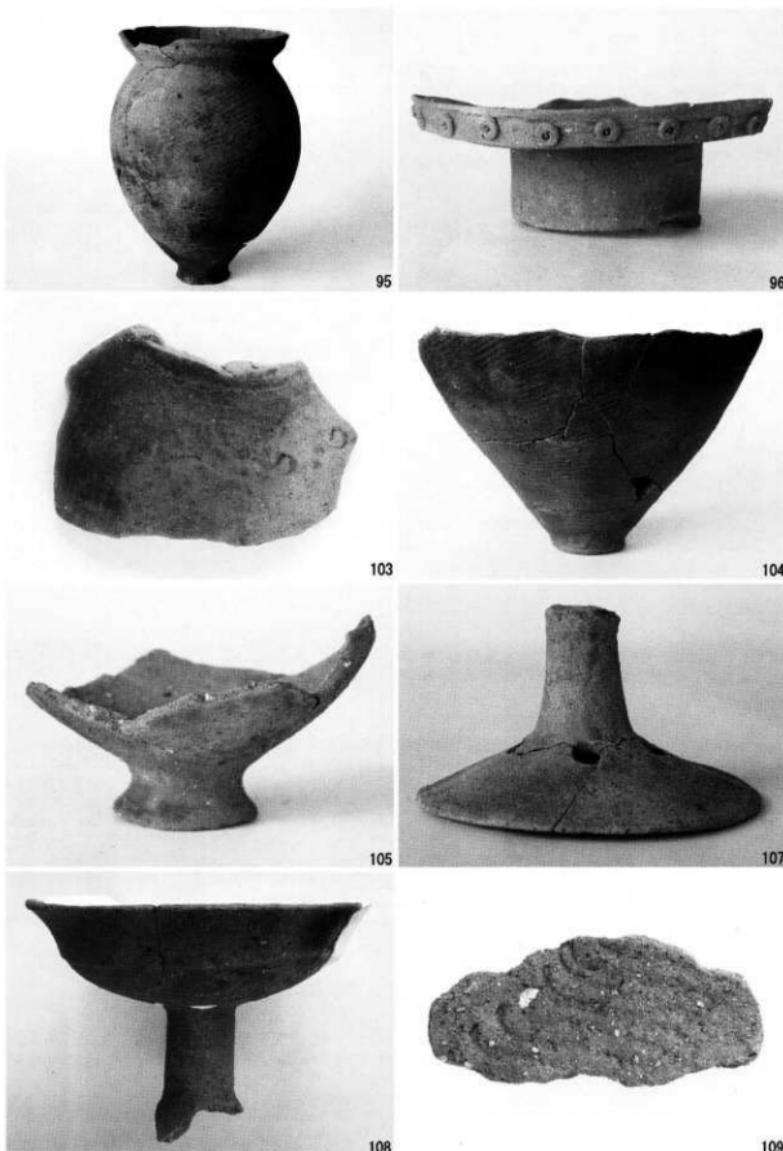


84



87

S D 230(77・78・83・84・87)出土遺物



4区SK202(95)、SD235(96)、5区SD239(103~105・107)、5層(108)、6区NR101(109)出土遺物

報告書抄録

ふりがな	こおりがわいせき だい6・7じちょうさ
書名	郡川遺跡 第6・7次調査
副書名	
巻次	
シリーズ名	財団法人 八尾市文化財調査研究会報告
シリーズ番号	126
編著者名	木村聰明・成海佳子・西村公助
編集機関	財団法人 八尾市文化財調査研究会
所在地	〒581-0821 大阪府八尾市辛町西丁目58-2 TEL・FAX 072-994-4700
発行年月日	西暦2009年3月27日

ふりがな 所 収 遺 跡	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こおりがわいせき 郡川遺跡 (第6次調査)	おおさかみやおかしくろだに 大阪府八尾市黒谷一丁目	27212	60	34度37分 16秒	135度38分 06秒	20070423 ~ 20070427	約44	保育所 建設
こおりがわいせき 郡川遺跡 (第7次調査)	おおさかみやおかしくろだに 大阪府八尾市黒谷一丁目	27212	60	34度37分 16秒	135度38分 06秒	20070911 ~ 20071127	約851.2	保育所 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
郡川遺跡 (第6次調査)	集落	弥生時代後期 古墳時代後期 奈良～平安時代	落込み 落込み 溝	弥生土器 上部器 須恵器 土師器 瓦器	
郡川遺跡 (第7次調査)	集落	弥生時代後期前葉以前 弥生時代後期前葉 弥生時代後期中葉 古墳時代後期 平安～鎌倉時代	河川 土坑 小穴 墓 河川 土坑 小穴 溝 溝 土坑 溝	弥生土器 弥生土器 土師器 須恵器 土師器 瓦器	

要約	第6次調査では奈良～平安時代の溝と弥生～古墳時代の落込みを検出した。 第7次調査では弥生時代後期前葉に比定できる柱穴跡を検出した。また、弥生時代後期中葉の溝には、多量の上器が廃棄されていることが判明した。
----	---

(財)八尾市文化財調査研究会報告125

郡川遺跡

- I 第6次調査
- II 第7次調査

発行 平成21年3月
編集 財団法人 八尾市文化財調査研究会
〒581-0821
大阪府八尾市幸町四丁目58番地の2
TEL・FAX 072-994-4700

印刷 株式会社熨斗秀興堂
〒577-0827
東大阪市衣摺5丁目20-10
TEL 06(6727) 1166
表紙 レザック66 <260kg>
本文 ニューエイジ <70kg>
図版 マットアート <110kg>

0.32